
グランディール

石室悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グランデール

【Nコード】

N0687C

【作者名】

石室悠

【あらすじ】

天才的才能を持ちながら、機械の普及のせいで職に就けず、食いつなぐためにアルバイト生活をしている魔術師コーデュ。ある日コーデュは、額に公告を貼り付けた男に出会い、彼に興味を持ち始める。何しろ彼は、とんでもない守銭奴だった。

始まるの前に

「コーデュ、コーデュ……」

友人の名をしきりに呼びながら、泣きじゃくる少女の姿が有った。年の頃は、一五、六といったところだろうか。質素なワンピースを着た、黒髪の少女。彼女は、部屋の隅にしゃがみこんで、泣き続けている。

部屋は小さいが、粗末と言うほど酷くもない。机と椅子、ベッドが各々二つ。窓からは雪に覆われた雄大な山々が顔を覗かせていた。暖炉は静かに火を熾し、部屋を暖めている。

この部屋で彼女は、コーデュという同い年の少女と同居していた。コーデュは少女のすぐ側で、同じようにしゃがみこんでいた。金髪で、端正な顔立ちをしている。同じような格好をしていたが、泣きじゃくる少女とは正反対に、コーデュは無表情だった。

「コーデュ、どうしてこうなのかしら？ どうして……」

「カティーナ……」

「親が居ないって、そんなに悪い事なの？ コーデュ……」
少女……カティーナは、手の中で握り締めた紙を見る。それはカティーナの目指した、国立魔術研究所からの通知で、一言「不合格」と書かれていた。

カティーナとコーデュは、孤児だった。二人は物心付く前から、この孤児院の一室で共に暮らしている。

時勢が良いので、孤児だからといって、特別苦しい生活をする必要は無かった。魔術を伝統的に大事にする国柄もあるのだろう。魔力を持って生まれて来た彼女らの世話は、孤児院がしてくれた。虐待なども無く、コーデュもカティーナも、健やかに今日まで生きてきた。

けれど、差別や迫害を感じなかったのは、孤児院の中に居たからで。

彼女達は一五歳を迎え、社会に飛び出そうとした。その矢先の出来事だった。

二人はどちらも、目指す場所にことごとく入れなかった。それも実力の及ばないところ……履歴書で、ふるい落とされた。

彼女達には、両親を証明する手立てが無かった。ただそれだけの理由で。

「コーデュ……私、もうダメ。もう、頑張れない……」

「カティーナ……」

「親がこんなに憎いのって、初めてよ。私の一五年間を、見た事も無い両親が棒に振ったなんて。信じられない。もう嫌。もうダメよ……」

カティーナは「不合格」と書かれた紙を破り捨て、そして俯いた。ひとしきり泣いて、もう涙も出なくなっていた。

そんなカティーナを見て、コーデュは静かに言う。

「カティーナ。……ちよつと前に、今のカティーナみたいだった私に、貴方、何て言ったか覚えてる？」

「……？」

「『コーデュ、負けちゃダメ。孤児だつて偏見をするような人達、こつちから願ひ下げよ。諦めちゃダメ。諦めたら、何もかも終わだよ』って」

「……」

コーデュの言葉に、カティーナは苦笑いを浮かべる。

「偉そうな事、言っちゃったね」

「でも私、カティーナの言ってる事、間違つてとは思わない。……カティーナ。私、考えたんだけど」

「何？ コーデュ……」

「孤児院を、出ようと思うの」

その言葉に、カティーナは目を丸くした。

「出るって、どうやって。コーデュだって仕事、全部落ちたんでしょ？」

「正規の仕事はね。でも、アルバイトなら残ってるもの。生きていきようなんて、いくらでもあるわ」

「でも、夢はどうするの。貴方、魔術師として生きていくって……」
「夢の叶え方って、一つじゃないと思うの。研究所に入る事だけが、魔術師の道じゃないわ」

コーデュはそう言って、カティーナを見る。

「カティーナ。確かに私達は孤児よ。偏見も受けて、試験に落ちたわ。理不尽よ。……でも、理不尽だって俯いてても、何も変わらないじゃない」

「……コーデュ」

「それに私達、本当に境遇だけで差別されたのかしら？ 私は魔術一筋に生きてきたから、常識が無いと自分でも思ってるの。……もし、私が孤児じゃなかったとして、本当にそれだけで、私は目指していた場所に入れたのかな、って」

もしそれだけじゃなかったら、結局同じ。私、両親が居ないから、って言い訳をして、境遇に甘えてるだけよね？

コーデュは天井を仰いで言う。

「私、孤児院を出て、社会を知ってみようと思うの。何だかんだ言っただけで私達、ずっと保護されてきたでしょう？ ……ここを出てもう一度、自分を鍛え直して……それで、それでもダメなら、理不尽を嘆こうと思うの。でも、今は嘆きたくない。諦めたくない」

「……」

「……カティーナは、どうする？」

コーデュが尋ねると、カティーナはしばらく悩んで、答えた。

「……なんだか、コーデュの言ってる事も、正しい気がする……。でも、……そうね、私達、一緒に居たら、お互い甘えちゃいそう。……お別れ、しなきゃいけないと思う」

「そうね」

一〇年以上、一緒に暮らして来たけれど。

これからは、違う道を歩かなくてはいけない。そうする事が、お

互い成長するために必要なのだ。

カティーナはともかく、コーデュは既に決心しているようだった。そんなコーデュを見て、カティーナも「うん」と頷く。

「判った。私も、ここを出てみる。それで、どっちが早く夢を掴めるか、競争しましょ」

「そうね、カティーナ」

「あ、でも、音信不通は寂しいもんね。ここを經由して、文通しましょうよ。お互いの現状を報告し合いながら……頑張ろう」

「……うん。……頑張ろう、カティーナ」

少女達はそう言って、そして笑い合った。

数日の後、彼女らはそれぞれ、長年過ごしてきた孤児院を出る事になる。

二人は文通を続けながらも、夢を掴むまでお互いに会わない事を約束した。

いつか、境遇を乗り越え、成功した時に。

そして今。

二人が約束を交わした日から、既に四年が経過していた。

1 コーデュ

ここに、コンデュと名付けられた大陸が在る。

大陸には現在、四つの王国が存在する。

北西に、農業と工芸品の王国アルキーシュ。北東に、機械と鉱山の王国キャドゥー。南西に、魔術の王国メルティーナ。南東に、酪農と漁業の王国クレンセオス。

四つの王国は互いに争い等も無く、一口に言えば平和な時代を迎えていた。

しかし、今から五年程前より普及し始めた、北東の王国キャドゥーの「機械」及び「科学」なる物が、これまでであった伝統的技術「魔術」の必要性を無くしていた。

「魔術」は古くから「魔力」を持って生まれた人間だけが使えるもので、それが身分格差等を生み出していた。だが、それが揺らぎ、魔術でしか出来なかった事が、今や続々と機械化している。

これまで「魔術師」と呼ばれる人々は、そうでない人々の上に君臨していたが、「機械」の台頭で立場は逆転。「魔術師」達は地位も職も失ってしまった。

さらに「機械」や「科学」は、長年大陸に住んでいた「魔族」、いわゆるモンスターを駆逐した。現在も化け猫だの山男だの、そういう類は居るが、人類にとって極めて有害なモンスターは既に滅んでいる。

また「機械」は、下克上の時代を作り出し、王はその主権を失い、敬われるが何事も成さぬ、ただの金持ちへと変貌していた。

どの国もそうであるのと同じで、アルキーシュも、そんな国となっている。

元々アルキーシュは、美術工芸品と農耕を主な産業としていた王国だった。しかし近年、機械の参入によって工芸品もその多くが、

魔術師や職人の手作業を必要としなくなってきた。

そして人民は特に意味も無く「国王陛下」と見た事も無い老人を呼び、その子らを「王子様」と妄想を込めて呼んでいた。

人民政府なるものが誕生し、国の治安はそちらが守り、完全に王族はお飾り以外の何者でもない。しかし建前上、居る。

だから、庶民にとって王族とは、違う世界の生き物だった。

ましてや、生活に苦しむ労働者にとっては、限りなくどうでも良い。

そんな時代である。

秋風が少しづつ吹き始め、夏に別れを告げる頃。

アルキーシュ王国領内の、閑静で小さな村、ロキシヌ。

街道沿いにレストランや宿がひしめき合う、小さな村である。旅人は集うが、賑わうほどではない。裏通りには居住者達の家々が、ひっそりと佇む。さらに裏手には、畑や牧場が広がる。

ある朝、そんな街並みの一角、とあるレストランの中で、

「コーデュ。アンタ、今日限りで解雇だよ」

女将である中年女性が、営業スマイルを浮かべて言った。

言われた方も、

「そーですか」

とつまらなそうに答えるのみだった。

コーデュという名の妙齢の女性は、空色の瞳で、金の長い髪を横は長く垂らし、後ろは巻き上げている。その耳は人のそれより長く鋭い。エルフの証だ。左側の耳にだけ、金の装飾の入った、小奇麗な赤い宝石のピアスをしている。

一見、モデルか女優か、と思うほどのプロポーションだが、着ている服はメイド服。銀メッキのトレイを持って、客に笑顔と料理を運ぶのが仕事。ウェイトレスだ。

しかし困った事に、彼女は極めて無表情だった。それが解雇の原

因でもある。

「全く、アンタみたいに愛想の悪い子は初めてだよ。次は接客じゃない仕事を選んだね、皿洗いとか、調理師とか」

「ご忠告、ありがとうございます」

「ほら、最後の仕事。行つといい」

女将に言われて、コーデュはスタスタと店に出て行った。

これが彼女の、一三回目の失業である。

アルキーシュ王国の王都、クレシュ。その西の小さな村がここ、ロキシヌ。

クレシュへの観光客や商人が集うこの村の、主な産業は宿泊施設と酒場である。

よって、求人も接客業と調理師が中心になる。

が、コーデュは困った事に、そのどちらの素質も無かった。

彼女は魔術師だ。それも超天才と、その筋の人間からは言われる才女である。

しかし、時代が時代だ。魔術は人件費がかかる、と敬遠され、その多くの作業が機械化された現代社会。

コーデュは魔術師である以外に、他の何一つ、良い所が無い。しかも現在、魔術師という職業は、廃れに廃れていた。

そして天才は職に就けずに、求人広告を見る日々を送っていたのだ。

今年の夏、コーデュは「若くて可愛い女の子募集中」という求人を見つけて、ロキシヌ村の小さなレストランに就職した。

最初は女将も「こんな美人そうは居ない」と喜んでいたが、何せ手が遅く、表情も無ければ態度も悪いコーデュである。時には横着をして魔術でポイポイ皿を配ったりする。

そんな事をしていたら、クビになった。

そうなった理由は大いにコーデュに有るが、それに気付ければ人間、失業なんてしないもので。

当のコーデュは、「私って本当に運が無いなあ。もう諦めて、今流行のニートにでもなるうかしら」ぐらいに思っていたのであった。

さて、このレストランでの最後の仕事のために、コーデュは店に出た。

すると朝一から、店に並ぶ一人の男が居る。

金髪で、妙に身なりの良い男だ。長身痩躯で、顔立ちが良いが、どこか嫌味ったらしそうでもある。白いフリルのブラウスに、細いベルベットのパンツ。全身から「私は貴族です、金持ちです」と叫んでいるような雰囲気さえある。

彼は毎朝必ず、この店に来る。目当てはコーデュのようだった。何故なら毎度、バラの花束を抱えて来ては、それをコーデュに押し付けようとするからである。

今時、こんなダサイ王子様きどり、流行らないわよ。

コーデュはいつもそう思っていた。しかし、営業スマイルも出来ないが、嫌そうな顔もしない無表情が、より一層このストーカーの誤解を深めているようだった。

コーデュはドアまで行くと、「Open」の看板を掲げ、鍵を開ける。すぐに男が入って来て「おお、麗しのレディ！ 今朝もまた一段と美しい！」と、お決まりの挨拶。

「どうも。いらっしやいませ」

コーデュは淡々と言って、彼をテーブルに案内した。彼は必ず厨房に一番近い席に座って、そしてニコニコとコーデュを見つめ続ける。

「ご注文はお決まりでしょうか」

「チョコレートパフェを大盛りで頼もう！」

そしていつも、チョコレートパフェ（大盛）を頼む。

「かしこまりました」

コーデュがオーダーを通して帰って来る。他に客は居ない。というか、こんな朝からレストランに来る客など居ない。

モーニングサービスなどと洒落た事をする店でもないし、第一、この辺りでは朝食は宿専属の食堂が用意する。宿泊者は宿で、地元民は自宅で朝食を取るのが普通。

だのに、この男は毎朝チョコレートパフェ（大盛）だけを食べに来る。何故かといえば、それは恐らく、そこにコーデュが居るから。という事は、この男は本気のストーカーだ。

コーデュは自分の中で完全に結論を出していた。それは男の方も同じに違いない。ただし、その内容は全く違うのだろうが。

「レディ、今日こそ私の気持ちを、この花束と共に受け取ってくだまえ！ 私と愛を語ろう！ いつまでそうして、私を焦らしているんだい」

「チップは受け取らない事になっていますから」

極めて事務的に答えるが、それがより一層ストーカー魂に火をつけるらしい。男は「ああああ」と微妙な裏声を出して、「レディはつれない、でもそれがいい」などと呟いている。

コーデュは一つ溜息を吐いてから、考えた。

明日からどうするか。とりあえず職業安定所に行かなくては。今度は裏方とか、魔術師募集とか、そういう求人があるかもしれない。そんなかな希望を胸に、職業安定所に向かって早一三回。またしても失業した原因は、この男にも有るかもしれない、とコーデュは思った。

実はこの男、八つ前の仕事（花屋の店員）の時についたストーカーなのだ。

接客向きで無いのはその時から同じで、コーデュはずっと裏方として、花の手入れや梱包に携わっていた。やっと仕事にも慣れてきたある日、店番を頼まれて仕方なく店先に立っていると、この男がやって来た。

「妹に誕生日プレゼントをしたくてね。花束を作ってくれないか」と気取って注文する男に、バラの花束を作って渡した。すると彼は

「おお！ レディには才がある、そして美しい！」

などと言い、散々騒いだ挙句、それから一年近くストーキングを続けている。毎日店に来ては「レディはこの世に残された、ただ一人の天使だ！」と時代遅れ甚だしいセリフを吐いて、その場で踊ったり跳ねたり、あらゆる意味で気持ちが悪かった。

そして失業すると、どういう手段で調べているのか、次の職場にも現れる。現れて一週間程度でクビになる。それは一種のジンクスと化していた。

よし、今度こそ、このストーカーに見つからないようにしよう。そして未来有る人生の第一歩を踏み出すのよ、コーデュ。

コーデュは無表情で自分に言い聞かせた。とりあえず、帰りに変装キットを買っておこうと決意する。

そうとも知らず、ストーカーはいつも通りチョコレートパフェを食べて、「明日も来るよハニー、式が楽しみだ！」と叫んで、帰って行った。

否、就業時間まで待ち伏せしているのだが、バレバレだった。いつそ治安当局に通報すれば話は早いのだが、コーデュは彼から犯罪の匂いを感じていたわけではないし、何よりも面倒なので、放っておいた。

翌朝、コーデュは買ってきた変装セットを使用した。

サングラスに鼻眼鏡で髭とテンガロンハット。ものすごくボンデージな謎のヴィジュアル系コートを身に着け、最小限の荷物をトラUNKに詰め込み、家を出た。

ついでに夜逃げ（？）も実行である。大家には昨日金を払っておいだったので、逃げている対象は件のストーカー以外の何者でもないが、ここ半年を過ごした安アパートを静かに出る。

ストーカーはオペラグラス片手に、茂みの中で徹夜した模様だ。

しかし彼は、変装中のコーデュに見向きもしない。ちなみに、他の人間はコーデュを見ずには居られない様子だった。仕方が無い。度を越えて怪しすぎる。

だが、ストーカーはまさに「コーデュ」しか目に入っていないように、カーテン越しの物陰をじつと見つめるばかり。その視線は、獲物を狙うハンターの如く真剣である。

それ故に彼は、コーデュをみすみす逃がしてしまったわけだ。

コーデュは「さようなら、永遠に」と心の中で呟いて、その場を後にした。

職業安定所は、ロキシヌ村の外れに有る。

東の隣国キヤドゥーが開発した機械は、庶民にも影響を与えた。

魔術師がまず打撃を受けたが、その後には庶民にも波及する。

五年程前から普及し始めた機械は、最初は魔術の分野を、そして徐々に、全ての作業を人の手から奪っていく。人件費削減のために、大量の人間がクビになり、街は求職者に溢れている。それも機械の弊害と言えよう。

だが彼らは、普通の人間なりに良い所がある。秀でてもないが、劣ってもいないのだ。どうでもいい仕事なら、まだこの世には存在していて、こと人の尊厳を捨てれば、生きていきようなどいくらでもあった。

しかしコーデュはまだ諦めていなかった。魔術師にも、新たな生き残り方があるに違いないと信じ、夢見ていた。そして、彼女は夢を幻想にするタイプではなかった。

物陰で変装セットを脱ぎ、ゴミ箱に捨てる。それでもまだ不安なので、伊達眼鏡をかけて、普段なら絶対しないような、それはもうババ臭い格好をした。長袖のシャツに、ダブダブのワンピース。しかも足首まできっちり隠すものだ。ついでに三角巾まで頭に巻いて、

コーデュはやや警戒しながら、職業安定所に入った。

職業安定所は今日も大盛況。景気はいいと政府が言っていたが、一番いいのはここだろう、とコーデュは考えながら奥に進む。行列と人ごみにもみくちゃにされながら、コーデュは求人広告を探す。

もはやストーリーカーの事などどうでも良い。とにかく、人の群れを押しつけて、壁に貼り付けられた広告を見る。

魔術師、魔術、魔魔魔ママMA、と眼を走らせていると突然、どつと笑い声が上がった。求人の文字を読むのに必死だったコーデュが振り向くほどだから、よほどのものだ。

見ると、一人の青年が立っていた。

クセのある銀髪、赤い瞳。シャキツとした白いシャツを着こなす、見るからに育ちの良さそうな青年だ。そんな彼がこんな場所に居るだけでも、眼を引くところはあったが、何よりもコーデュが驚いたのは、

「広告主募集中？」

彼の額に、赤い字でそう書いてあった事だ。

「兄ちゃん、そりゃあ、なんの冗談だい？」

一人の男が笑って尋ねると、青年ははつきりと答えた。

「商売です」

「商売？」

「人が一番見てしまうのは、高い土地料を払う看板でも、毎朝欠かさずに配る広告でもない。人の顔だと言います」

青年は額に「広告主募集中」と書いた滑稽な姿であったが、実に毅然としていた。

「僕はこの額を看板として貸し出します。ついでに僕の出来る限り、広告主をアピールする。料金は通常の広告代金の一〇分一程度で結構です。誰か試しに、僕に広告を打ちませんか」

面白い事と言う人だな、とコーデュは思った。

古来から、額は神聖な場所だった。こと、過去に魔術師達は、己

の威厳を額に現した。特定の色と紋様によって、自分の地位を示すのは当然の事で、中には宝石を直に埋め込むような者も居た。

それもまた、魔術の衰退と共に消え、今や額の価値は無いに等しい。

しかし、彼はもう一度、今の時代に合わせた額の使い方を考えたのだ。

コーデュは少し嬉しくなった。彼はきつと、魔術師に違いないと思った。理由は額を使っているから、というだけだった。が、今の世の中で、必死に生きようとしている仲間だと感じたのだ。

「面白いね、お兄ちゃん。それで、ニコニコ笑ってくれるのかい、無表情だけ」

と、一人の若い女性が青年に声をかけた。求人申し込み窓口の方から出て来たので、恐らく雇う側の人間なのだろう。

「こんな冗談みたいな事をして、笑っていたら馬鹿にされます。あくまで宣伝は無表情、及び微笑程度で行います。街角で契約者の店名、事業内容を演説します。お望みなら街頭販売等も受け付けますが、別料金になります」

「ふうん。試しに、ウチでやってみるかい？　ウチは『ボルタ工房』って言うんだ」

早速商談がついたようだった。人々が見守る中、女性と広告青年は、職業安定所を出て行く。

「……」

コーデュはふと思いついて、その『ボルタ工房』の求人票を探した。

ストーカーに長く憑かれれば、生き方も多少変わってくるようだ。コーデュは彼と話がしてみたい、と思った。エルフは気高く、また魔術師は気難しいという基本性質がある。それゆえ、営業スマイルの一つも出来ないコーデュだが、この時ばかりは違った。

自分の無表情さすら味方につけて、生きようとするあの態度。彼が魔術師だろうが、そうでなかるうが、コーデュは彼と、とにかく

話がしてみたくなったのだ。

そして三〇分後、コーデュは見事『ボルタ工房』の求人広告を見
つけ、そしてチャンスが来たのだと確信した。

『ボルタ工房……美術工芸品取り扱い。魔術に心得有る人間、募
集中』

2 ウェル

ボルタ工房は、職業安定所からほど近い場所に、ひっそりと佇んでいた。

品の良い、ウッドハウスのような店先には、ガラス細工が飾られている。機械は多方面に進歩したが、ガラス工芸は未だ手仕事の部分が多い。

これは期待出来そうだとコーデュは思った。

店に入ると、たくさんの商品が棚に置かれていた。ステンドグラス風のランプシェード、グラス、猫の置物。全てガラス工芸だ。

そして店内には先ほど見た、店長と思わしき女性と、件の広告青年が居た。

「あら、いらつしやい。今日は定休日なんだけどね」

まだ若い店長だった。黒い髪を短く切って、質素な作業服を着ている。特別美人という訳でもなかったが、どこか惹かれる眼をした女性だった。働く女の魅力、という奴なのかもしれない。

「あ、あの。求人広告を見て、来たんですが」

「ああ。早いねえ。じゃあ、ちよつと待っててくれる？　まずはこの人に宣伝をしてもらわなきゃ」

店主はそう言つて、青年に説明を始めた。

「ウチはまだ、開店したばかりだね。ガラス工芸品を扱ってるんだけど、製法が特殊なんだ。今流行の、魔法石を溶かし込んで。だから普通のガラスより色が強い。そこらへんを、宣伝して欲しいんだよ」

「判りました。出来る限りやってみます」

説明を受けて、青年は鏡に向かい、額に文字を書き始めた。『ボルタ工房』と書くつもりようだ。

鏡を見ながら字を書くのは、意外と難しい。が、青年はスラスラと字を書いていく。

器用ねえ、と感心しながら見ていると、店主がコーデュの方に来た。
「求人には、魔術師募集中って書いたけど。貴方、魔術師？」

「はい」

「じゃあ、デモンストレーションで、何かやってみてくれる？」

「あ、そうね。炎系は使えるかしら？ ついでだから、窯に火を付けて欲しいんだけど」

「判りました」

極めて事務的に答え、コーデュは窯に向かった。小さなレンガ作りの窯だ。コーデュはあらかじめ薪を幾つか窯に放り込むと、無造作に手を翳す。そしてスツと撫でるように手を動かすと、紅い粒が空間から沸き起こり、それはやがて炎へと変わった。

「……すごい。あんた、詠唱要らずかい」

店主が感動しているのを見て、コーデュは「ええ」と素っ気無く答えた。

魔術には、方程式がある。

しかし、方程式に辿り着けるのは、最高位の術師だけだ。

一般に、魔術は「世界を取り巻く全て」に、手本を示してやらなければならぬ。

炎を起こしたければ、まず大気に説く。そして、大地に説き、植物に説く。すると、自然は応え、ある場所に酸素を寄せ、火種を起こしてくれる。

この世界において、魔術は「自然に対して哀願する」といったものだった。

それを根底から覆したのが、過去に世界を牛耳らんとした大魔術師、シュレグの一族だった。

自然に対して説くのではなく、現象を起こすために必要な物を、あらかじめ一つの方程式にしてしまう。そうすると、自然に説くための詠唱が必要無くなる。さらに経験を積みめば、心に念じるだけで方程式が動く。

しかしそれらは、乱用されてはならない秘術として、封印された。事実、世界を征服しようとしたシュレグの一族は殆どが世界から追放され、その技術は国の定める研究機関にのみ伝わったはずだ。

その秘術を、コーデュは手に入れていた。

「あたしも魔術師だけだね。詠唱要らずは初めて見たよ」

それほど特殊な技であったが、店主はその過去について気にした様子は無かった。もっとも、シュレグ一族が世界征服を目論んだ時代から、既に五〇〇年以上が経過している。よほど気にかけていない限り、そういった事実は失念しているのが普通だ。

「昨今では、何の意味も有りませんが……」

「いや、すごい事だよ！ あんた、ウチで働いておくれよ。行程で結構、魔術を使うんだ。良かったら、あたしと一緒に作ってくれないかい」

コーデュは内心踊り狂って喜んだ。この言葉を何年待っただろう。彼女は私を必要としているのよ、コーデュ！ なんて幸せな事！ しかし、喜びは表に出ず、コーデュは「はい、よろしく願います」とやはり無表情で言うのみだった。

今日は定休日だから、働かなくていいよ。家は有るの？ 無いなら、ウチに空き部屋があるから、どうぞ。

上手い話はどんどん続く。夢のような展開に、コーデュは有頂天だった。

喜びつつコーデュが工芸品の手引き書を読んでいると、唐突に例の広告男が口を開いた。

「君は魔術師のようだね」

職に就けた歓びに、コーデュは彼と話したかった事もすっかり忘れていた。その事を思い出し、コーデュは手引書をしまうと、広告男を見る。

「ええ、そうだけど」

「すごいね」

「貴方のおでこも、相当だけどね」

「僕はしがない二三人目さ」

「？」

良く判らない言葉に、コーデュが訝しい顔を見ると、広告男はしばらく考えて、

「ふむ。……君、もし僕がこの仕事でお金を稼いだら、僕に雇われないかい」

と言つて来た。

「貴方に？ どうして。何のために？」

広告男に雇われる。それは、自分もおでこに広告を打つという事だろうか。それは遠慮したい。

コーデュはそう考えて、少し嫌そうに尋ねたが、答えは思いもよらぬものだった。

「冒険旅行。つまり、僕は旅に出ようと思っているんだ。しかし、仲間が居ない。探し物を見つけるには仲間が必要だ、と父に言われた」

「旅？ 今時？ ……探し物って、何？」

「それを探す旅でもある」

広告男はコーデュを見た。彼の額には『ボルタ工房』と書かれていて、かなり滑稽な状況だったが、顔は真剣そのものだ。

「君さえ良ければ、僕と一緒に、探し物の旅に行かないか。君のような素晴らしい魔術師と出会って、僕は声をかけずに居られなかった。考えてみて欲しい」

という事は、彼は魔術師では無いのだ。コーデュは少し落胆する。広告男はそのまま店を出て行くとする。そして扉に手をかけた時、思い出したように言った。

「僕は、ウェルと呼ばれている」

「……ああ、名前？ 私、コーデュよ」

「あ、そうそう、あたしはフィリエ」

店の奥から出て来た店主も、ついでに名乗った。ウエルは小さく頷くと、そのまま店を出て行く。フィリエによれば、彼は宿を取っているらしい。

「それにしても、変わった人だねえ、あの人」

「ええ……」

目の前で引き抜きの話をしていたというのに、フィリエは気にした風も無い。

この人も変わってるな、とコーデュが思っていると、フィリエが言う。

「ま、あんたも変わってるけどね！」

「そうですか？」

「そうだよ」

「そうですかねえ……」

コーデュが首を傾げると、フィリエは笑って言った。

「それにあんたも、探し物を探す旅の途中みたいだしね」

翌朝から、ボルタ工房は大賑わいだった。

ウエルがどんな宣伝をしたのか判らないが、とにかく客が入る。

そして「これか」と商品を眺め、その多くが買い求めて来た。

自分は接客向きではないと事前に説明し、コーデュは店の奥で魔術による仕事をし、接客はフィリエが自ら行った。

客足は勢いを緩めず、昼を過ぎる頃には店内に入りきれなくなり、さらにはその人ばかりを見て寄ってくる人間でいっぱいになってしまった。

そして、商品は見事に無くなった。

夕方には閉店して、商品の製作にかからなければならなかった。収益を数えて、喜びながら製品作りに精を出す二人のもとに、ウエルが戻って来た。

「ウエル！ あんた、どんな宣伝をしたのさ」

もう大変だったんだからね、と嬉しい文句をフィリエが言うと、ウエルは椅子に腰掛けながら言った。

「駅前で突っ立っていた。何の冗談だ、と聞かれたから、こちらら命がけだ、僕の首がかかっているんだ。世界で最も美しいとされるガラス美術品を、君達に伝えられなければ、僕の生まれてきた意味は全く無い、とかそんな事を答えて、地図を配った」

「……せ、世界で最も美しい、ねえ」

「それとか、幸福を招くガラス細工とか、古代シュレグ一族にまつわる技術の結晶とか、色々言った」

「さ、詐欺に抵触しないかしら？」

「さあ……まあ、彼らも信じた様子では無かったから、面白半分で見に来たんだろう。買って行ったという事は、彼らの価値基準と、この商品が天秤に乗ったという事ではないかな。詐欺には当たらないだろう」

ウエルは弁当と思われるサンドイッチを取り出しながら言った。

それを見てフィリエが慌てる。

「ちよつと待って、ちゃんと夕飯は用意してるわよ、看板さん。おかげさまで大盛況だったんだから、あんたに食べてもらわないと」
「……では、お言葉に甘えて」

その言葉にウエルは、あっさりとサンドイッチを袋にしまった。

その晩は三人で食事を取る事になった。店の二階は居住スペースになっていて、キッチンとリビングが有る。そこでフィリエは豪華な料理を作って待っていた。

コーデュは久々に贅沢な食事が出来る、と喜ぶ。しかしそれが、ウエルのおかげであって、自分が職に就けたからではない事が少し寂しい。

ウエルは額に広告を打つような人間だったが、妙に気品があった。フォークとナイフを使って、お上品にいつまでも食事を続ける姿は、

本当に貴族のようだった。額を除いては。

食事もそこに、フィリエは「今日の繁盛を知り合いに伝えに行く」と店を出る。しばらくして、コーデュは尋ねた。

「ねえ。ウエルって、どうしてそういう事、しようと思ったの？」

「そういう事とは？」

「おでこの……」

「ああ」

ウエルはコーンを一粒一粒口に運びながら、簡潔に答えた。

「金になると思ったから」

「でも、他にもお金を稼ぐ方法はいくらでもあったでしょ？ 掃除

とか、皿洗いとか。そうね、土木作業員」

「それらの方法は、確かに金稼ぎに向いている。しかし、非効率だ。僕は僕の体の一部に、誰かの名前を書くだけで、収入を得る事が出来る。まして、それを副業としながら、別の仕事をする事も可能。

そうすれば、金は早く集まる」

「でも、恥ずかしくないの？」

「万民が嫌がる事ほど、金になる。僕にとって額とは、僕の部品であって、尊厳を感じる場所ではないからね」

ウエルはステーキを小さく切って、口に運んでいく。

「……でも、お金持ちっぽい感じ、色々」

そんな仕種を見てコーデュが率直に言うと、ウエルは「うん」と小さく頷いた。

「資産を差してお金持ちと呼ぶなら、僕はその部類だろうね。でも僕は、現在の所持金の水準が低い」

「没落貴族って事？ あ、ごめんね」

「いや、君のように素直に言う人は嫌いじゃない。僕も言うからね…… 生憎、没落したわけではない。資産は現在も運用中だが、手元には無い。所持金を集めるために、僕はこうして額を売っている。

金は僕が旅に出るために必要だ。それは資産を切り崩して作らないと決めたから、苦労している」

「……あ、判った。でも、なるべく楽しんで稼ぎたいんでしょう」

「簡潔に言えば、そうなるね」

「ふうん」

コーデュはアイスクリームをつつきながら、考えた。

お金が有るのに、無くて、旅に出たくて、働かなきゃいけないけど、苦労はしたくない。

虫のいい話にも聞こえた。微妙に、意味の判らない話でもある。そもそも、何故そんなに旅に出たいのかも判らない。金持ちの酔狂だろうか？

コーデュがそんな事を考えていると、ウェルが尋ねて来た。

「君は魔術師だ。それも、とても優れた。どうしてこんな小さな村で、職探しを？」

「時代が悪かったのね」

コーデュは一つ溜息を吐いて言う。

「機械とかが発展して、私達魔術師の専売特許が崩れた。だから魔術師はもう、要らないの。どんな偉大な魔術師も、今は苦しいはずよ。本当にごく一部の人を除いて、殆どは社会のお荷物になっちゃったわけで……私もその一人」

「ふむ」

「下手に魔術ばかりやって来たから、魔術学院を卒業したら働けなくてね。メルティーナの国立魔術研究所は、履歴書で落ちちゃったし……コネも無いし。……でも私、諦めたくはなかったのね」

「と、言うത്？」

「私は私なりに、魔術と付き合いながら生きていきたい、と思ったの」

魔術師は不要。今の世界に溶け込んで、魔術を忘れるしかない。

多くの魔術師は、その術を捨て、一般社会に流れ落ちた。彼らはただのしがたい平民の一人になる。今まで培ってきたものを全て捨てて、ただの人間に。

そして残りは「時代が悪い」と現実も見ずに、恨みの世界に引き

こもってしまった。

そういう人々を、コーデュは何人も見てきた。だからこそ彼女は、そのどちらを選びたく無かった。

「ただ……その方法が判らない。魔術を捨てずに、意固地にもならない。そうやって生きていく、方法が判らないの。だから今はアルバイト生活をしてるんだけど……時々、結局皆と同じなんじゃないかって、不安になるわ」

「……ふむ。君も、探し物の途中のようだ」

ウエルは少しだけ嬉しそうに言った。

「僕も君も、同じ物を探している。見た目は違うのだろうが、きつと似ている。僕と一緒に、探しに行かないか。君が断っても、僕は探さなきゃいけない。いずれ僕はこの地を去る。それも、近いうちに。その時、君さえよければ……一緒に来てくれないかい」

それから数日、彼らの仕事は続いた。

ウエルの宣伝は素晴らしい効果で、連日客がつめかけ、商品は全て無くなる。その度にフィリエは大喜びで、ウエルに代金を支払った。

その額は少しずつ増えているようだった。

「看板も宣伝も、普通にやったら馬鹿みたいに金がかかるからね。これぐらい、安いもんだよ」

とは、フィリエ。コーデュにも賃金が支払われた。詠唱が無い分、作業が早いコーデュの力で、生産数が四倍に増えたからだった。

コーデュは生まれて初めて必要とされる事にやりがいを感じていた。しかし、何か物足りない。

これは、自分の探していた物ではない気がする。

そう考える度に、コーデュはウエルの言葉を思い出した。

3 コルト

コーデュとウエルがボルタ工房で働き始めて、一週間が経とうと
していた。

ウエルは着々と金銭を貯めたようで、「十分な金が出来た」と言
っている。工房自体もリピーターがついて、これからは安定した客
足が望めそうだった。

そしていよいよ、ウエルは旅立つ事にしたようだ。

その日、ウエルは宣伝を止め、朝から店の中でくつろいでいた。
フリーエに「旅に出る」と断りを入れ、鞆に色々詰め込み、準備を
している。

コーデュはまだ決断出来ないでいた。

フリーエは「行って来ていいよ、飽きたらまた帰って来て」と、決
して厄介払いではない態度で言ってくれる。

しかし、コーデュは決めかねていた。やっと見つけた職を手放し
てまで、旅に出るという決意が出来ないのだ。
と。

「ハニー！ やつと見つけたよ！」

工芸品を作っていたコーデュは、その馬鹿そうな声に、思わず手
を滑らせた。床に落ちたガラスが割れて、盛大な音を立てる。が、
店に居る全員の視線は、声のほうに向いていた。

そこには、件のストーカーが、バラの花束を抱えて立っていた。

ストーカー男は周囲の視線も気にせず、コーデュに近寄って言う。
「私はずっと、ずっと君が部屋から出るのを待っていたんだ！

だのに君ときたら、いつの間にかこんな所に！ イリユージョニス
トだね、ハニー！」

この勘違い男、またしても私の人生をメチャクチャにする気か。
今日という今日は、こいつに言う事言って、ついでに雷魔法でビ

リビリ言わせてやる、とコーデュは立ち上がる。

そしてコーデュが手を出し、方程式を組もうとした、その時、

「……は！」

ストーカーは何かに気付いて、突然コーデュから目を反らした。

コーデュが訝しんでそちらを見ると、ウエルが呆れた顔でストーカーを見ていた。

「き、き、貴様、二三番！」

ストーカーはワナワナと震えながら、バラの花束を落とす。何が起こっているのか判らず、皆が事の行方を見守っていると、ウエルは眉を寄せて言った。

「……そういう貴方は……えーと……一八番くらいですか？」

「二〇番だ！ 失敬な……！」

番号を言いながら、ストーカーは怒っている。が、見ている方には彼が怒る理由も、何が二〇番なのかも判らない。

「貴様、何故ここに居る！？ ……ま、まさか二三番、貴様、私の『王たる証』を奪うつもりか！？」

「さあ……」

とウエルは曖昧に首を振るだけだ。

「ぬぬぬ、貴様あゝ！」

ストーカーがあまりにも怒っているので、コーデュは止めるのも兼ねて、尋ねた。

「ねえ貴方、何の話をしているの。二三番とか、『王たる証』とか

……」

すると、ストーカーは今までの怒りも何処へやら。コーデュに向かってニツコリと笑みを浮かべると、気取ったポーズを決めて言う。「名乗り遅れてすまない、レディ。何を隠そう。私はコルティエ・ウエリッド・ユーロフステイ・ルーヴァイス・リュ・アルキーシュ。通称コルト。このアルキーシュ王国の、正当なる王子なのだ」

「二〇番目のね」

ウエルが付け足すと、辺りから「ええええー」と不満の声が上が

った。もちろん、コーデュも言った。

「キモいストーリーカーのクセに……」

思わず本音が出たが、ストーリーカーもといコルトは、聞こえた様子もなく、ウエルを指差して言った。

「そして奴！　滑稽極まりない格好をしたこの男！　こいつは二三番目の王子、つまり私の弟だ！」

コルトの言葉に、こちらにも不満の声が上がる。どちらも王子と言われても困る人間だった。

「ご自分が名乗られたのに、僕が二三番のままでは困りますね、一六番さん」

「二〇番だと言うのに！　そして私はコルトだ！」

「僕はウエルエツシュ・レンディア・カリフレイル・ルーヴァイス・リュ・アルキーシュ。アルキーシュ王国の、二三番目の王子です」

コーデュはとんでもない事が起きかかっている予感に、寒気さえ覚えた。

コーデュ大陸の歴史は古い。

そもそも五〇〇年以上前には、大陸内で五つの国が争い合っていたという。

お互いに攻防を繰り返す、長い長い戦争の時代。各国王達は、こぞって魔術の研究を進めた。専属の魔術師達を雇い、より強力な魔術の開発を要求していた。

そんな時代に生まれたのが、かのシュレグ一族、その筆頭たるザドウルーエ氏だった。今でも一般にシュレグと言うと、彼の事を指す。

元々、当時東の一带を支配していたモールという王国の、魔術研究者として生きてきたシュレグの一族は、エリート中のエリートだったという。

とりわけザドウルーエは天才と呼ばれ、現在世に伝わる禁術の多

くは、彼が開発したと伝えられている。召喚術に到っては、彼が全てを編み出したと言っても過言ではない。

また、「新魔術理論」という難解な著書を発行し、方程式による魔術の形成を確立した。彼はモール王国はおるか、世界の英雄であるはずだった。

ところがシュレグ一族は、ある時を境に、魔力の無い人々……彼ら魔術師の言うところの「凡人」達を攻撃し始めた。

モール王国を始めとし、近隣の国々はシュレグ一族の魔術に対抗出来ず、滅んでいく。「凡人」は処刑または奴隷とされ、魔術師達も多くが召喚術や魔術の礎のために犠牲となった。

もはや大陸がシュレグ一族に支配されようとしていた。

その時、四人の戦士が立ち上がったという。即ち、アルキーシュ、メルティーナ、キャドゥー、クレンセオス。現在の各国の初代王達だ。

彼らはシュレグ一族を滅ぼし、そしてそれぞれが、大陸を分けて、王国を作った。

アルキーシュ王国は、四人の一人、アルキーシュが作った国だ。

アルキーシュは国を定め、法を定めると、間もなく子供らに遺言を残して死んだ。

次の王は、最も価値の有る功績、グレイナス鉱山を発展させた、三男のユーグとする。

それ以来、アルキーシュ王国は、生まれた順に関係無く、父王の認める最大の功績者を次の王とした。やがてそれは、王位争いのルールとなる。

王の血を引く全ての男女は、一五歳になると仮の王権を与えられる。彼らは現在の王が死ぬまでに、自らの信じる、最も価値有る功績を手にし、王に説く。それを王が納得すれば、王位に近くなる。

常に王位への順番は開示されていて、王子また王女は、その成績表を見ながら王位を目指し奮闘する。ある者は発明をし、ある者は歌い、ある者は人々を救う。

そしてその結果として、物品及び人物を提示するのも、ルールだった。

現在の王ルーヴァイスは正室と二人の側室を抱え、その間に三六人もの子を作っている。そのうちの五名は既に死去し、残った三一名は全員が一五歳を超え、王位争いに参加しているという。

「私は、愛の世界を作る。その第一歩として、最愛の妻をこのレディにしようと思っていたのだ！　だのに、貴様……貴様は、私から王位を奪うつもりだな！？」

お互い名前も知らなかったのに、いつの間にか妻という事にされている。

コーデュはコルトの本気のストーカーっぷりに辟易してきた。第一なんだその、愛の世界なんて甘ったるくて馬鹿げた響き。夢でも見ているんじゃないの。

コーデュは色々頭が痛かったが、ウェルは平然としている。

「王位は奪い合うものだ、この国では定めています。不当な事ではないでしょう。第一、僕はそういうつもりで彼女と同じ職場になったわけでもないです……まあ、彼女さえ良ければ、同行して欲しいとは思ってますけど」

「なに、何処に連れて行くつもりだ！？　許さんぞ。断じて、断じて許さんぞ、二三番！」

コルトはひとしきり叫んで、そして言った。

「こうなったら、決闘だ！　彼女をかけて、決闘するのだ、二三番！」

で、コーデュは何か何だか判らないうちに、景品にされてしまっていた。

「あんたも大変ねえ、もてて」

「いや、これって、もてるとか、そんな感じの事ですか？」

コルトは「明日の正午、この店の前で決闘だ！」と言い捨てて去

った。「仕方ないなあ」と呟いて、ウエルは何処かに行ってしまった。決闘は受けるらしい。

その晩、店のリビングで夕飯を食べながら、フィリエはコーデュを茶化した。

「いい事よ、男に言い寄られるってのは。あたしは魔術師の誇りを捨てられなくてね、まだ男に縁が無いのよ。出来たら魔術師の夫が欲しいんだけどねえ」

「魔術師の夫婦かあ……いいなあ」

コーデュも溜息を吐いて、憂鬱そうに言う。

「でも、食べていけないかも……」

「そうなのよね。そこが困ったところ。あたしね、姉さんが居ただけど、死んじゃったの」

「え？」

「結構歳は離れててね。憧れの人だったよ、魔術師として生きてたから。でも男の魔術師と意気投合してね。結婚して……子供も作って。だけど、魔術師として生活する事は出来なかったんだろうね。

姉さんは必死で普通の仕事をして、挙句、息子と一緒に事故で死んじゃったんだってさ」

「……」

フィリエは悲しそうに笑って言う。

「それもあって、あたしは魔術師として精一杯生きていこうと思ったんだけど……メルティーナ国立魔術研究所の試験に落ちちゃってね」

「フィリエさんも？」

「あら、あんたもなの？ ……あんたがダメなら、あたしじゃダメなわけね」

フィリエは苦笑して、店内に置かれたガラス細工を見る。

「……結局、あたしは妥協して、この工芸品を始めたの」

フィリエの作るガラス工芸品は、どれも上品で美しい。繊細で、そしてどこか、物悲しさが漂っている。

これだけは売れない、とウィンドウに飾られている、女性の横顔をかたどった皿。その瞳は静かに伏せられ、陰鬱そうな表情を浮かべている。しかし、どこか惹かれる風情が有った。

「でも、あたしはこの仕事で生きていくしかないのよね、もう、お店開いちゃったし。店を始めたからには、お金が無いといけないしね」

「そう、ですね……」

「だからね、コーデュ。あたしはあんたが羨ましいんだよ」

「私が？」

コーデュが怪訝な顔を見ると、フィリエは愉快そうに笑って言う。「あんたは若い。才能も有る。そして、選択肢が目の前に転がってる。羨ましい話さ、どこへでも行けるんだからね。……あんた、良く考えて選びなよ。でも、慎重になる必要は無いからね。何事も経験、つてところも、あるから」

ただし。フィリエはコーデュの目を見つめて、言った。

「諦めちゃダメだよ。今を未来だとも思っちゃダメだ。常に先が有るって思っていないと、あたしみたいに、こんな所で止まっちゃうからね。あんたは、自分では気付いてないかもしれないけど、理想に一步でも近付こうって、思ってる。いい事だ。大事にするんだよ」フィリエの表情に影が差す。コーデュは思わず、大声を出していた。

「フィリエさんは、止まってなんか無いですよ。止まった人が、こんな綺麗な作品、作れるはず無い。大丈夫です。フィリエさんも、まだ諦めないで、頑張りましょう」

らしくない。自分でもそう思ったが、言わずには居られなかった。本当にダメになった人間の事は良く知っている。彼らはもう、どうしようもない事になってしまふ。作る事も、諦める事も出来ない人間になる。

コーデュはそんな人間を、何人も見てきた。それも、同じ魔術を志し、そして挫折した人々を。

けれどフィリエは店を開き、魔術を使って作品を売っている。それだけでも素晴らしい事だった。コーデュは所詮、彼女の試行錯誤の末に出来上がった物を、コピーしているに過ぎない。

そしてコーデュは、自分が理想に少しも近付いていない事に気付いていた。その上で、この場所に甘えるか否かを悩んでいた事に。

「……ありがとう、コーデュ」

フィリエは微笑んで言った。

「あんたは、ここで一生を終えるような子じゃないよ。まあ、あんたが納得してるなら話は別だ。でも、納得していないなら、その探し物を見つける努力をしたほうがいい。脚を止める事はいつでも出来るけどね、一度休んだら、もう一度歩き始めるのは、難しいんだよ」

フィリエの言葉は静かに、物悲しさを伴いながら、コーデュの中に染み込んでいった。

翌日、正午。ボルタ工房前には、ウエルの宣伝による効果ではない人だかりが出来ていた。小さな村なので、決闘云々の話が広がったのだろう。

そこには、コルトの姿もある。

「遅いつ。遅いぞ、二三番！」

約束の時間になっても現れないウエルに、コルトは不愉快さを隠せないようだった。

コーデュは内心、ウエルは来ない気がしていた。第一、コルトはともかく、ウエルには命をかけて戦う理由が殆ど無い。

「ねえ、王子様。そんなにコーデュの事が好きなら、決闘なんてよして、彼女に判断を任せたらどうなのさ」

フィリエが迷惑そうに言った。店の前で決闘などされたら、誰でも嫌だろう。が、コルトはそんな事は頭に無い様子だった。

「問題は、彼女を二三番が奪おうとした事だ！ 私に逃げる事は許されない。互いの命をかけて勝負するしか、方法は無い！」

どうしてそうなってしまふのか、コルト以外には全く判らなかつた。が、とにかく彼にとってこの問題は、もはやどちらかが死なない限り解決しないらしい。

コルトは何やら豪奢なレイピアを腰に差している。

今時、レイピアで決闘とは、古風な奴。

コーデュがそう思っていると、辺りがどよめき始めた。

「な、なんだ？」

コルトも困惑して辺りを見渡す。しばらくすると、その正体が割れた。

「わ、わわわ……」

「ウエ、ウエル……！？」

そこには、巨大な兵器を持ってこちらに向かってくる、ウエルの姿があつた。

「に、二三番！ それは何だ！？」

「コーツロット社製、二四mm砲。オーソドックスな軍用機銃ですね。通称デス・ロイド。秒間一〇〇発連射可能、一・五トン。車輪付き」

「そ、そういう事を聞いてるんじゃない！ な、何故そんな物を！？」

「何故つて、決闘するんでしょ？ えーと、一二番さん」

「二〇番だと言ってるだろうが！ だ、大体、そんなの決闘に使うな！ 卑怯だぞ！」

「決闘という言葉を辞書で引きましたが、一対一で戦う事とだけ書いてあつて、武器の指定はありませんでした。だからこれは正々堂々とした決闘ですよ。卑怯と断定する根拠は無いですし、この場合、準備不足な貴方のほうが悪いのでは？」

「な、何い……！？」

自信満々で語る人間は、例えその言動に多少問題が有ろうとも、

信賴を寄せられるという。

今、ウエルは何一つ迷い無く、恐ろしい事を強気で喋っている。すると、他の者達も何となく、「それもそうだなあ」という気になる。それこそ大物の格という奴だが、コルトにはそれを受け入れる事は出来なかった。

何故なら、「それもそうだな」と思ったが最後、射殺されるからだ。

「ま、待て！ お前の言っている事は、理屈に過ぎない！ どう明文化されていようと、そこには人間の倫理観が存在するべきだ！ 倫理的に言って、お前の行動は間違っているぞ！」

コルトの言葉に、人々は「そうだそうだ」と言いが、ウエルは顔色も変えず、静かに反駁する。

「ではお聞きしますが、貴方は暴漢に襲われた時、暴力や殺人は倫理的に正しくない行為だと信じて、なすがままになるのですか」

「いや、それは……」

「倫理観とはその場でどうにでも傾くものです。それを根拠に僕の行動を批判するのは、解せないですね」

「む、むむ……」

コルトは黙ってしまった。何とか反論しようとするのだが、いかんせん、ウエルの方は自信满满過ぎて、反論するには随分な気力や論拠が必要だった。

黙ってしまうと射殺されるような気がしたので、コルトが必死に次の手を考えていると、

「じゃあ、より公平になるよう、クジで好きな武器を決めようじゃないですか」

ウエルがとんでもない提案をした。

「そうですね……実は、こんな事もあるとかと、クジを用意してきました。赤い丸がついている棒と、そうでない棒。赤いのを引いたほうは、このデス・ロイドを。そうでないほうは、拳骨一つで戦う事にしましょう」

「な、拳骨一つだと!？」

「コレ相手では、他のどんな武器が有っても無駄です。さあどうぞ、引いてください、一六番さん」

「二〇番っ！ ようし、じゃあ……こっちだ！」

コルトが勢い良く棒を引つ張る。棒の先には、赤い丸がついていた。

「やった！ やった！」

コルトは大喜びである。一方、ウエルはやはり表情も変えず、残ったクジをしまった。

「では、貴方はコレをどうぞ」

「ウエ、ウエル、ダメじゃない、止めなさいよ、死んじゃうわ」

コーデュが思わず言うつと、ウエルは僅かに笑って言つた。

「僕が死ぬとしたら、それもまた運命。気にしないで」

「運命つて…… ちょっと、ウエル！ 一緒に旅に行くつて、約束だつたじゃない！」

「へえ。コーデュが了承してくれていたとは、初耳だ」

ウエルが言うつと、コーデュは慌てる。

「まだ行くとは言つてないけど、行こうかなあ、ぐらいい思つてるの」

「張り合いがないなあ。ここで約束してよ。どうせ僕は、あの……」

「一四番さんの……」

「二〇番だと言つてるだろうが！」

「……手にかかつて死ぬ身なんだから、夢ぐらい見せてくれてもいいだろう？」

「……判つた。私、貴方と一緒に旅に行く。何処まで一緒になるか判らないけど、私も探し物を探す旅がしたいの」

「ありがとう」

ウエルは今までにない満面の笑顔を浮かべて言つた。

ボルタ工房の前には相変わらず、人だかりが出来ていた。しかし、

その一角が抜けている。コルトの正面だ。

物騒な武器、デス・ロイドを向けられて平気な人間は居ない。決闘の巻き添えを食ってはいけないと、ウエルの後方には一人も居なかった。

コルトは笑みを浮かべて、デス・ロイドを持っている。

「決闘は、一〇歩下がって振り返るのがルールでしたね」

「そうだ！ 貴様もそれくらいはわきまえているようだな」

「では、さっそく始めましょう」

片や二四mm砲、片や拳骨。

あまりにも不自然で、結果は火を見るより明らかな決闘だった。

「では」

ウエルが後ろを向いた。コルトも同じように後ろを向く。

「一步」

ウエルがあっさり一步目を踏み出した時、コルトは恐ろしい事に気づいた。

「お、重っ」

デス・ロイドは、とんでもなく重かった。車輪が付いているとはいえ、何せ重さは一・五トン。歩くのも大事である。

「二歩」

「ま、待て、待てって」

ゴロゴロと重い機銃を押しながら、コルトは必死であった。そして、更に恐ろしい事に気付いた。

「どうやって振り向くんか」

この調子だと、振り向いている間に、ウエルが側に来てしまうかもしれない。

コルトは必死に考えた。悩みに悩んで、そして名案を思いついた。（そうだ、片側の車輪に、石をかませよう。そうしたら、押すと回転するはずだ）

そして、その事で頭がいっぱいになってしまった。

「九歩」

そうこうしている内に、彼らは所定の歩数を終えようとしていた。
「十歩」

ウエルは十歩目を踏み終えると、すぐに振り返る。コルトも、車輪の片側に石をかませ、グツと全力で押す。見事に機銃は回り、銃身がウエルを捉えた。

勝った！ コルトは確信して、次の瞬間、気付いた。

「……あれ、これ、……どうやって使うんだ」

これは強そうだ、と見た目に騙されて、コルトは気付かなかった。その機銃の使い方も知らない事に。

「あれ？ あれ？ こ、これか？ これか？」

ボタンやレバーを押したり引いたりしてみるのが、機銃は沈黙を守っている。そうこうしている内に、ウエルが近寄って来ていた。

「いい事、教えてあげましょうか」

「お、コレの使い方か！？」

「ええ」

ウエルはニツコリ笑って言った。

「それ、レプリカなんです」

「え」

そして、コルトが呆けている間に、ウエルは全力で彼にアッパーを喰らわせた。

ウエルがこの一週間で荒稼ぎしたとは言っても、本物の機銃を買えるほどの金額ではなかった。そこでウエルは、コーツロット社の経営する美術館に赴いた。

そして半日、広告を打つ事と引き換えに、デス・ロイドのレプリカを貸してもらっていた。第一、本物の軍用兵器が民間人に売られるはずも無い。良く考えれば判る事だ。

「どんな時代でも、本物を見極める審美眼は、貴族、庶民に隔たりなく必要なのです。そして無知であると、どれほど良い物を持っていても意味が無い。その典型例ですね」

ウエルはそう言つて、ポケットから残りのクジの棒を取り出した。赤い丸が書いてあった。

「ウエ、ウエル……」

コーデュが呆気にとられてみると、ウエルはニッコリ笑つて言つた。

「やあ。一緒に旅に出る、約束だったね」

「だ、騙したわね!？」

「騙してない。極自然に、あの状況で僕は死んでいただろう。嘘はついていない。もし君が騙されたと感じるなら、それは君が余計な憶測をして勘違いしたに過ぎない」

「ウエルー!」

コーデュが思わず怒鳴る。その声に反応してか、気絶していたコルトが目覚めました。

「う……ま、負けた……」

コルトは顎を撫でながら、涙目で言つた。

「仕方ない……レディは、二三番に譲る……」

「よして下さい。僕は彼女を嫁にするつもりはありませんよ。その代わりに、要求していいですか」

「何なりと言うがいい。男の約束だからな……」

「では、一二番さん。まずは僕の名前を覚えて下さい」

「だーから……ん? どういう事だ、二三番」

コルトが眉を寄せると、ウエルは言つた。

「今日から、貴方は僕の部下になって下さい。まあ、いわゆる一つの、駒ですね」

「こ、駒!? 駒だと、貴様!？」

「決闘に負けて、命があるだけマシでしょう」

「……あれ、ちょっと待って。じゃあ、もしかして……」

コーデュが嫌な予感に尋ねると、ウエルはきっぱりと言つた。

「僕らはこの三人で、旅に出ます」

「よりによって、このストーリーカーと!？」

コーデュは驚き、そして力いっぱいウエルを睨みつけたが、彼はニコニコ笑っているだけだった。

コーデュはこの日ほど、自分の無表情な顔を呪った事は無かった。

4 旅立ち

ロキシ―又村に、今日も朝が来た。

村全体にとつては、いつもと変わらぬ朝だった。人々は目を覚まし、いつも通りの生活を始める。それだけだ。

しかし、その三人だけは違った。

「……」

未だ不服そうな顔をしているのは、コーデュ。もつとも、どれだけ笑顔を作っても無表情なのだから、不服そうに見えるのは、見る方の勝手かもしれない。

けれど、確かにコーデュは不服だった。

今日のコーデュは、黒いミニのワンピースを着ていた。日差し避けにフード付きの白いカーディガンを羽織っている。ヒールの付いたブーツを履き、手にはいつもの、全財産の入った皮のトランク。

「それで旅をする気？」

露出の高い服に、多少驚いたと見えるウエルがコーデュに尋ねる。
「そうよ」

コーデュは素っ気無く返す。「すごいね」とウエルは感心して言うが、彼の方も相当だった。

オフホワイトのタートルネックの上から、皮のベスト。意味もなくベルト、そこに大きめのウエストポーチ。だらけたズボン。安物の革の靴。

今時こんな「たびびとのふく」みたいなもの、何処で買ってきたのか。コーデュがそのセンスを疑う。第一、額に「ロイヤルホテルミュール」と書いてあるのに、どうして人の事を言う気になるか。何しろ騙された事に怒っているコーデュであるから、何もかもが腹が立つて仕方ない。

おまけに、

「おおおお、レディ！ 凄く美しい！」

語彙力に欠けた叫びを上げる、コルトが隣に居るのだ。

コルトは白のフリルブラウスをしっかりと、赤いベルベットのズボンに押し込んでいる。時期はずれな黒いボア付きのコートを羽織り、「今日のテーマは闘牛士」とばかり。しかし、何故かウエスタンブーツ。さらに彼は大量の荷物を持っていた。リュックが三つに、トランクが二つ。いつそ一輪車にでも乗せたほうが利口そうな量だった。

「暑くないの」

秋になったとはいえ、日中はまだ暑い。

コーデュがとりあえず忠告を兼ねて尋ねたが、「美観の前には感情など消え失せてしまうのさ、レディ」と意味の判らない返事しかもらえなかった。

熱中症で倒れても放っておこう、とコーデュは静かに考える。

「うーん、どこからどう見ても、不審な三人パーティーだね」

見送りに来たフリーエが、面白そうに言った。

それはそうだ。額広告青年と、露出度高めの美女と、厚着の闘牛士もどきである。これほど意味不明な連中、そうはいないだろう。

「からかわないで下さい。ホントに不安なんですから」

「まあまあ。頑張つて来なよ、コーデュ。前も言っただけど、飽きたらここに帰って来ていいからね……あ、そうだ。これ、餞別だよ」

フリーエはそう言っていると、髪飾りを差し出してきた。大きな翡翠の付いたかんざしだ。黒いレースが括り付けられていて、上品な仕上がりだった。

「餞別？」

「お守りみたいなもんさ。あたしが丹精込めて作ったんだからね、大事にしとくれよ」

「でも、そんな、戴けないです」

「いいから、いいから。貰えるモンは貰うのが、女の賢い生き方さ」
「やんわりお断りして焦らすのは、男だけにしときな。」

フィリエはそう言ってコーデュに近寄ると、その巻き上げた髪にかんざしを差し込む。金の髪に翡翠の光が映えた。

「夢が叶うようにお祈りしといたからね。無くさないでくれよ？」

「ありがとうございます。お礼はまた、帰って来たら……」

「そんなのはいいよ。それより、体を大事にね。無理はするんじゃないよ」

「はい。短い間でしたけど、お世話になりました」

そして三人は、ロキシヌ村を出て、更に西へと旅立った。

「そういえば貴方達、同じネックレスをしてるのね」

街道をのんびりと西に向かいながら、コーデュはふと、ウエルとコルトの胸元に、同じネックレスがあるのに気付いた。

元々風体がとんでもないので今まで気付かなかったが、男がネックレスというのも珍しい。それは銀の二連ネックレスで、一つだけ青い宝石がついていた。

コーデュの言葉に、ウエルが「ああ」と頷いて答える。

「王権所持者の証だからね」

「それが？」

「そう。一五歳を超えた王子、王女は皆身に着けてるよ。一目でお互いがライバルだと判るようにね。何せ、三〇人以上子供が居るから、顔も名前も、ましてや番号も覚えきれないし」

王子と王女達には各々、生まれた順に番号が振られている。つまり、コルトは二〇人目の、ウエルは二三人目の子だ。現国王に「王たる証」を提出するまでは、原則としてその番号が王位継承権の順位となる。よって番号は実際の順位には対応していない。

「ネックレスがあるから、僕もこの人が兄弟だと判ったんだ。でないと兄弟と気付きもしなかったらうね」

ウエルはコルトを指差して言った。どうやら名前や番号を覚えるのも、言い直されるのも面倒なので、「この人」にしたらしい。

「そうよね。ウエルとコルトって、全然似てないもの。すれ違ったって兄弟とは思わないでしょうね」

ウエルとコルトは、人となりもさるものながら、容姿も全く似ていない。

ウエルはクセのある銀髪に赤い瞳、背丈は低く、どちらかというとのつぺりとした顔立ちだ。

一方のコルトは、力強くまっすぐな金髪緑眼で、ひよろりと長くいかにも性格の悪そうな顔までしている。

ウエルは一見貧乏そうだし、コルトはどんなに貧困に喘いでいても、外見だけは裕福極まりなさそうだった。

「それはそうさレディ！ ウエルと私は、異母兄弟だからね」

コルトは誇らしげに胸に手を当てて言った。

「私の母ウエリードは、父上の八番目の側室なんだ。そのみみたいな一五番目とは訳が違う」

「……側室の時点で、そんなに誇れる事じゃ無いような気もするけど」

「う……し、しかし、ウエルよりも正室に七番も近い」

コルトは少し自信が揺らいだようだったが、すぐに立ち直る。

「それに、私の母上は貴族の生まれ！ ウエルのところは、平民」

「平民？ ……あ、でも、なんとなく判るかも」

じゃないと王子なのにアルバイトなんてね、とコーデュは少し面白そうに言った。そしてはたと気付く。

「……そういえば、コルトはお金、どうしてるの。馬鹿みたいに使ってるけど」

「うん？ ああ、我々王の子は、全員同額を国から支給されているんだよ、レディ」

「通称、王族給付金。税金から取るんだけどね」

ウエルが補足する。

「僕らは生まれてきて、王の子だと証明されると、一定の金額を最初に貰う。それをどう使うかは、親と子供次第。勉強につき込む人

も、芸術につき込む人もいるけど、普通はこの人みたいに、チビチビと遊んで食い潰していくね」

「嫌な言い方をするな。私が放蕩息子のようにじゃないか」

その通りだと思う。コーデュは言いたかったが、一応言わないでおいた。

「そういう貴様はどうした。何故、王子だというのに、そんなけつたいな事をする」

「僕の事は放っておいて下さい。僕は元からある金銭に甘えたくないんです」

「変わっているな、ウエルは」

「良く言われます」

なんだかんだ言って、この兄弟は仲がいいのかもしれない。決して仲睦まじいとか、そういう類ではなくて。そう、腐れ縁とか、凸凹コンビとか、そんな。

コーデュはそんな事を考えながら、二人を見ていた。

「そのうち、金稼ぎが主体になるんじゃないか。旅に出る事よりも」

コルトが揶揄すると、ウエルは「可能性は大いに有ります」と頷いた。

「夢や志を持って、その場しのぎの金策に没頭し、気付けば一生が終わっている。大いにありえる事です。ですが、簡単に予防する事が出来ます」

「ほう？」

「夢を幻想に変えない事。夢を口実にしない事。やりたい事があるなら、今から始める。金策の果てではなく、現在進行形で夢を追う。それだけでも違うと思いますよ。何せ、金が無いのに叶う夢なんて殆ど無いですからね」

「……そうね、お金は必要ね……」

ウエルの言葉はコーデュの中に響いていた。

どんなに大きな夢も、志も、腹を膨らませてはくれない。目指す場所があるからこそ、働かねばならないが、ふと気付けば夢は幻想

へと変わり、既に手の届かない場所にある。

コーデュはそういう人々を多く見てきた。それだけに、自分がそれと同じでないか、疑問に思う。不安にさえなる。

「ああ、レディ。お金に困る事が有ったら、私にいつでも相談しておくれ。私は君のためなら全財産を投げ打てるよ」

「じゃあさつさと飢え死にして下さいよ」

「お前は関係ない、これは私とレディの問題なんだ。夫婦だからな」そして相変わらず、コルトは勘違い全開だった。

コーデュは苦笑して、首を振る。

悩んでも仕方が無い。考えない事は良くないが、悩んでも意味が無いのだ。

とりあえず、道があるからには、進んでみるのもいいかもしれない。

「ところで……その王族つて、多いの？」

「今の国王の子供は、現在三人。その全員に給付金が配られているんだ。国民としてはたまったもんじゃないだろうね」

「三人？ ……子沢山ねえ」

「今の代が歴史上、一番子供が多いって話だよ」

「父上は愛が深く、そして広いからな」

「そうでしょうか？ ただの女好きのようにも思いますが」

「父上の悪口を言うな、ウエル」

道中ずつと言い合いを続ける兄弟と共に、コーデュは街道を進んで行った。

その日の夜は、隣村のトゥエルで宿泊する事になった。

トゥエルは小さく、長閑な農村だ。花畑が名物だそうだが、決して大規模ではなく、小さなものが数個あるというだけだった。特に娯楽施設なども無く、宿屋も一つしかない。ウエル達はそこに泊まるしかなかった。

宿は小さな酒場と軒を連ねていたの、彼らは夜になると、訪ねてみた。

木で作られた質素な酒場で、客の姿はまばらだった。マスターが暇そうにグラスを磨いている。

コーデュとコルトはテーブル席に座り、ウエルは一人でカウンタ―に腰掛けると、マスターに切り出した。

「ここら辺りで、お金になりそうな話は無いですか」

「さあ……静かな村ですからね。ところでお客さん、そのおでこのは、なんですか」

怪訝そうな顔のマスターに、ウエルは親切丁寧に、自分の事業内容を教えた。

「ははあ、額に広告をね。それは嫌でも目に入りますね。いや、上手く考えたもんだ」

「どうですか。明日にでも、広告を打ちませんか」

「面白そうですね。試しにお願いしてみようかな。近頃はお客もめつきり減ってね」

マスターは嘆息して、ウエルに注文を尋ねた。

平和な世の中である。

冒険旅行記では、勇者が悪い魔物を退治して報酬を受けたり、洞窟に入って財宝を見つけたり、王様に感謝されて宝物庫を開けてもらえる、などと書いてある。

しかし、それは物騒な時代の話だ。

平和という区切りがあまりに長く続いたこの大陸は、魔物の脅威を排除し、同時に一攫千金や、名を挙げる夢も失っていた。

冒険者は旅に出るため、金を稼がなくてはならない。中にはアルバイトで何年も貯めた金で、数週間の冒険旅行を満喫する者も居るという。

それはウエル達も例外ではなかった。

他の王子はともかく、ウエルはあくまで「王族給付金」という物

を使おうとしなかった。そうならば、おのずと資金が必要になる。ウエルはその資金を稼ぐために、額に広告を打つ事にしたようだった。

しかし、何も資金繰りに悩んでいるのは、彼らだけではない。

長い平和の末に市民全体が、特に大きな夢も持たないが、大きな不幸も無く、そして常に金銭に余裕は無い、という生活を送っていた。

「だからね、お金儲けの手っ取り早い話なんて、やっぱり無いですよ。こんな辺鄙な村じゃ、特にねえ」

マスターが言くと、ウエルは頷いた。

「いや、いいんです。なら、広告で稼ぐだけですから」

「でも、なんだか酒場のマスターとして、ちよつと申し訳ないな…

…あ、そうだ」

マスターは何かを思い出したようで、顔を明るくさせて言った。

「長老会にね、苦情が出てるんですよ。その事実関係を調査するつてのは、どうですか。小金くらいなら報酬として貰えるかもしれないですよ」

「苦情、ですか」

「そうです。この村の裏手に、山が有るんですがね。そこに、一人の男が住んでるんです。その男が夜な夜な、怪しい儀式をしているつて噂が流れていましてね。不気味でしょう。残り少ないモンスターを捕獲しては、連れ帰っているだとか。色々ね」

「ほう。それは不審ですね」

「そうですね。本当かどうかを確かめて報告するだけでも、長老会としては喜ぶんじやないですかね。報酬も多少なら、私のほうから頼めますよ」

「いいですね」

ウエルは頷いた。

「明日、行ってみます」

しばらくしてウエルは料理を持ってカウンターを離れた。テーブルへ向かうと、既に座っていたコルトとコーデュも、定食を食べている。ウエルも料理を置いて加わった。

「明日、この店を宣伝する。それと、山に登る」

「山？　どういう事？」

コーデュが尋ねる。ウエルはオニオングラスセをつつきながら答えた。

「宣伝の給金だけでもかまわないけど、手に入るお金は多い方がいいからね。……不審な男性が、山に住んでるそうだ。男性の素性を調べてくれば、多少の報酬はあるらしい」

「は。ウエルは金、金。金の亡者だな。世の中、金ばかりではないぞ。愛だ、愛」

コルトが笑うと、ウエルは横目で見ながら、

「じゃあ、貴方の全財産を下さいよ」と言った。

「な、そ、そんなのは無理だ」

「どうしてですか。愛でお腹が膨れるんでしょう。金は要らないんでしょう。僕に下さい」

「極論するな！　私だって金は必要だ」

「必要な金を親に頼る貴方と僕と、どっちが金の亡者かは不明ですけどね」

「なんだとお」

「やめて、二人とも。いちいち喧嘩しないで」

コーデュは両者の争いを止めて、溜息を吐いた。

本当にこの二人は似ていない。どこまでも正反対で、かつ、相性が悪い。どちらも一步も譲らずに、自分の理想を貫いていくタイプだ。

ふとコーデュは、自分はどちらでも無いと気付いた。金も無いし、愛も無い。そして理想に向かう強い意志も無い。

「……」

この変な男達より、自分はもつとつまらない人間ではないか。
そんな事を考えていると、

「そういえば、コーデュ。そのピアスは立派だね」

突然ウエルが言った。コーデュは一瞬反応に困ったが、やがて「
ああ」と左耳のピアスに触れる。

大粒の赤い宝石のピアスだった。宝石の中央には、鳥のような金の筋模様が入っている。高価そうなピアスだったが、左耳にしか付けられていなかった。

「さては、ウエル。ブランド物だから高く売れそうだが、そんな事を言うつもりだな」

「違いますよ。ただ……どこかで見た事があるような……と」

「それには同意見だが、お前にも見覚えがあるなら、きつとブランド物だ」

「勝手に決めないで。これは何でもないの。いわゆる、親の形見つて奴だから」

コーデュが静かに言うと、二人は目を丸くして、そして気まずそうな顔をする。

「おい、余計な事を言って、彼女を悲しませるな」

「誰がブランド物と決め付けたんですか、誰が」

「大丈夫、気にしてないわ。物心付いた時には、もう親が居なかったから、別に悲しくも無いの。このピアスだって、気付いたらついてたし、親の形見だって思ってるだけだし」

「そうか……」

ウエルとコルトは気まずそうに顔をふせたままだ。なんだかんだ言つて、親の居ない境遇というものを想像も出来ないのだろう。

「ところで、どうしてもその山に登るの？ 私はあんまり……」

話題を元に戻すと、ウエルも若干安心した顔で応える。

「別に、行きたくないのは構わないけど。その場合、働いてもらわないと」

「ええ？ ……もしかして、おでこに……？」

「それ以外に日給……この程度、手に入る職があれば、それでもいい。僕の給料に期待してちゃダメだよ。それはただの極潰し。仲間というからには、お互い協力しないと」

「……じゃあ、ついていく……コルトは？」

「私もついていこう。社会見学だ。ルグネスも暇そうだし」
「ルグネス？」

聞いた事の無い単語にコーデュが首を傾げると、コルトは「ああ」と気付いて言う。

「私の護衛だ。平和な時代とは言え、王子が一人で歩くのは危険だからね」

「護衛？ 何処に居るの？」

「常人に見つからないよう、いつも隠密行動をしている。まあ、注意深く私を見ていれば、そのうち見れるかもしれないが。とても気配の薄い男だね。私でも時々気付かない事がある」

「……それって護衛の意味、あるの……？」

「それが困った話でね、レディ。こう平和な世の中では、全く出番が無い。彼も不服だと思うんだ。だから多少無茶をして、彼にも仕事をさせてやらないと、ノイローゼになっても困るからね」

となれば、コルトはそのルグネスなる護衛をハラハラさせるためだけに、山を登る気のようなのだ。

こいつは相当、困った王子だね。

コーデュが改めて感心して、それからウェルを見た。

「……で、ウェルは？ 護衛」

「僕は、護衛を雇う金があったいなので、解雇しました」

「こ、こら、ウェル。何を勝手に。父上直属の派遣員だろう」

「他の兄弟にでも使い回しするでしょう」

「しかし、それで、王宮とのやり取りはどうしてるんだ」

「ああ……母上が、監視員を雇っているようで……いつも同じ人が、ウロウロしているのから……一応、見張られてはいるみたいですよ」

彼が勝手に王宮に報告してるんじゃないですか。

ウエルはあっけらかんと言ってるのける。

「でも、……ウエル。一人旅って、危ないんじゃないの？」

コーデュが思わず尋ねると、ウエルはきよとした顔をして、
言った。

「何言ってるの。そのための、君じゃないか」

5 裏山にて

秋を迎えようとしている山は、まだ青いが、少しずつ暖色を帯び始めている。

人の手は入っているが、過保護ではない。道は有るが、歩くのがやつと。

実のなる木は、村の近くに。少し奥に入ると、雑木は杉へと姿を変える。足元はふんわりと、羽毛のような感触。

三人はトウエル村の裏山に来ていた。皮のブーツに腐葉土が付くのを嫌がりながら、コルトは看板を見つけて読み上げる。

「熊出没注意。ルグネスが喜びそうだ」

「その護衛さんって、強いのか？」

いつものブーツはヒールもあるし、山歩きには適してない、とコーデュは安物のブーツを買って履いていた。選択は正解だったと言えよう。フラフラと足元がおぼつかないコルトを最後尾に、ウエル達は順調に山を登っていた。

「強いさ。試験は好成績で通過した」

「まあ、試験と実戦は、違いますからね」

「悪口を言つと、ルグネスに殺されるかもしれないぞ」

「その後、ルグネスさんも殺されますよ、母上に」

山奥でもこの兄弟は言い争いを止めない。それはそれで仲がいいのかもしれない、とコーデュは思う。

「う、レンディア叔母様が……叔母様とルグネスだと……判らないな……」

「どういう王妃様なの、それ」

「いや、とにかく凄いのだ、ウエルの母は。ほんとに、もう」

「へえ……」

何がどう凄いのかは全く判らないが、とにかく凄いらしい。コルトの表情から見ても判る。

「ともかく、ルグネスは私がまだ幼い時から、ずっと一緒に暮らして来た男なのだ。実の兄弟のようなのだとさえ思っている」

「……ところで……そのルグネスさんは、貴方が窮地になると来るんですか」

「来るだろうな。でないと、護衛の意味が無い」

「へえ……」

「なんだ、何を疑っている」

コルトが不愉快そうに顔を顰めると、ウエルは言った。

「だって、貴方の後ろに、熊さんが居ますよ」

「何？ は、冗談はよせ。お前も下手だな、人を脅かすならもっと、大きなリアクションで……」

コルトは笑いながら振り返り、そして。

熊と目が合った。

「あ」

「熊さん」

コルトは笑ったまま、コーデュは無表情のまま固まり、そしてウエルはその間にもそそくさと逃げる。

ややして、熊が唸り声を上げた。その声に、やっとコルトは現状に気付く。

「うわああああああ、助けてくれええー、ルグネスー……！！」

コルトは叫んで走り始めた。その後ろを、熊が咆哮を上げて駆けて行く。コーデュはその間に、木に登った。ウエルがそうしていたからだ。

「あ、あれ？ あれ？ ルグネス？ ルグネスさーん？」

コルトは逃げながら名を呼んだが、護衛らしい人物は現れない。その間にも、熊はコルトを追い掛け回している。

「ルグネスー！ てめえ、クビだー！」

コルトは叫びながら他の二人を探した。全力疾走しながら上を見ると、二人は木の上で傍観に徹していた。

「うおおーい、ウエル！ コーデュ！ 助けてくれ！」

コルトが必死に訴えるが、ウエルもコーデュも実に冷めた様子であった。

「貴方が襲われている隙に、僕達は逃げ延びます。せいぜい頑張って生きて下さい」

「ななな、何を言う、薄情者っ」

「愛の世界を作るんでしょう。さあ、愛するコーデュを守るため、熊と戦うんだ！」

「そりゃあ、私だってな、コーデュのためなら死ねるが、なんかこれは違う気がするぞ、なんか！」

コルトが叫ぶ。しかし、余所見をしたのが災いした。コルトは木の根に脚を引っ掛け、盛大にすっ転ぶ。

「はぶべ！」

腐葉土に頭から突っ込んだコルトは、慌てて起き上がるが、時、既に遅し。コルトの眼前に、熊の顔があった。

「ひっ」

いよいよコルトも終わりか……と、ウエルがコーデュに目配せする。

コーデュはスツと右手を伸ばし、熊に狙いをつける。方程式を組立て、その式がコーデュの手の平から漏れ、僅かに光を発し……と。

コルトの背後から、小さな黒犬が飛び出した。黒犬は熊の鼻先に噛み付く。

熊は咆哮を上げて、犬を振り払おうとした。が、熊が腕を振ると、黒犬の姿は霧散する。

「……召喚獣」

「召喚獣だって？」

コーデュの呟きに、ウエルは驚いた。となれば、近くに召喚師が居るという事だ。

更にどこからか黒犬が現れた。良く見ると、それはいわゆる「犬」

という種族の生き物では無い。毛並みは霧のように揺れ、頭部には三つ目の金の瞳。

霧の体を持つ、牽制を主たる用途とされる召喚獣……フェロネスだ。

フェロネスは飛びついては消えを繰り返し、ついに熊を追い払った。熊の姿が見えなくなると、フェロネスそのものも姿を消した。

「……た、助かった」

体中に土や落ち葉を付けたコルトが、安堵の溜息を漏らす。

安全である事を確認して、ウエルとコーデュは木から降りると、コルトに歩み寄った。コルトは汚れを叩き落としながら、ウエルを睨みつけて叫ぶ。

「貴様、私を見殺しにしようとしたな!？」

「滅相も無い。人を悪党みたいに。的にしようとした事は否定しません」

「充分な悪党だ!」

「ごめんなさい、コルト。攻撃魔法を使うつもりだったんだけど、やっぱりが安定しないと、当てにくくて……」

「本当かい!? 本当に助ける気、あったのかい、レディ!？」

さすがにコルトもこの時ばかりは、惚れた女に詰め寄った。コーデュは必死で頷く。

「何せ、こんな時代でしょ。私も攻撃魔法は取得してるけど、殆ど使った事が無いの。式を組み立てるのはすぐ出来るんだけど、実際に撃つのは結構、難しくて……特に、標的が動くと誤射する可能性も高いし、下手したら、コルトを苦しまないようにあの世に送れたかも……」

「そ、それはそれで、レディの手にかかって死ねるんだから、いいが」

「そこはいいんですか」

ウエルが思わずつつこむ。どうもコルトが怒っている部分は、ウエルのために死にそうになった、という点で、コーデュの事はい

らしい。

「全く、実の兄を餌にするとは……なんて奴だ。お前は本物の守銭奴だ。冷酷非道だ」

「なんとでも言って下さい」

コルトはしきりに罵言を浴びせていたが、当のウエルは全く気にかけていないようだった。

「第一、ルグネスの奴、こういう時のために雇っているというのに、何をしているんだ。後で痛い目に合わせてやる、おのれえ……」などとコルトは呟き続けていた。

「皆さん、大丈夫でしたか」

三人に声をかける者があった。

見れば、壮年の男が立っていた。暗い茶色のローブに身を包んでいる。クセのある、手入れをしていないような黒い長髪に、少し伸びた髭。腰には皮の袋、右手には櫂の杖。足元には、先ほどのフェロネスが一匹。

「……助けて下さったのですか」

ウエルが尋ねると、男は苦笑して答えた。

「この季節、熊達は少し気が立ってましてね。軽く脅してやれば落ち着くんですが。私も困っているので、フェロネスに見回りをさせているのですよ」

「という事は、貴方は、召喚師ですか」

「はは……自称、ですがね」

ここではまた、熊が出るかもしれません。狭いですが、私の住居においでなさい。

男はそう言って、三人と共に、山を登った。

熊に襲われた場所から、そう遠く無い場所に、その小屋は有った。丸木で作られた、こじんまりとした小屋だった。母屋に、納屋が二つ。畑に井戸。その付近を、やはりフェロネスが何匹か、歩き回

っていた。番犬として使っているのだろう。

召喚術は、魔術としては邪道の部類に入る。

シュレグー族が、方程式を編み出し、その末に開発したのが、一連の召喚術である。

召喚、とは言うが、実際には何かを呼ぶ訳ではない。

元となる生物と、起動に必要な物質を魔術的に結合する。そうして出来上がったものが、召喚獣と呼ばれているに過ぎない。いわば、生物を交えた錬金術の事だ。

例えば、フェロネス。彼らは犬と、闇鉱石、蝙蝠等を合成して作られる。合成時に、彼らの神経及び精神に、ある種の式を書き込めば、術者の思い通りに動く駒になる。

ただ、下等動物の脳に書き込める式には限りがある。複雑な動きをさせるには、要領が足りない。一般に、If……（であれば、××をする）といった式を、数個組み合わせる程度。残りは自由領域になる。

それは戦時下においては非常に有効な魔術であったが、平時になると、途端に動物愛護の観点から非難を浴びる事になった。何せ召喚術の最高峰は、人間を材料とする事も有ったという。政府は公に彼らを弾圧し、召喚術をみだりに使ってはならぬ、と法で説いた。そして召喚術と召喚師は、時代の波の中で、消滅していったのだった。

ただし明確な罰則等はないため、研究所でも未だに取り扱っている。生活のため、密かに使い続けている者も多少は居るらしい。彼もその一人なのだろう。

「私も、召喚師の子として生まれて、色々大変でした。両親は何とか魔術研究所に入れたんですが、私はどうにも落ちこぼれですね。そりゃあもう……苦労しましたよ」

男はベイトリオン・クレッセルと名乗った。

召喚師の血を引き、召喚術を会得したが、魔術研究所に入れなか

つたため、社会からもつまはじきにされた、と彼は語る。

「魔術師でさえ、近頃は民間に通用しませんからね。召喚師なんてなおの事で……仕方なく、こうして山ごもりをして、静かに暮らしているんですが……それでも、やはりダメなんじゃないかな。こうして見知らぬ人が、わざわざ訪れるという事は……」

ベイトリオンは苦笑しながら、三人を家の中に招いた。

小さなキッチンと、リビング。狭い母屋には、テーブルが一つと、椅子が四つ。

それだけの家だった。ウエル達は椅子に座らせてもらう。

（一人暮らしみたいだけど、それにしては椅子が多いわね）

コーデュは四つも有る椅子に首を傾げたが、普通家具屋はセットで売るし、多めに買ってしまっただけだろう、とそれ以上は疑問に思わなかった。

ベイトリオンはコーヒーを用意しながら、ウエルに尋ねた。

「それで、トゥエル村の人々は、私にどうして欲しいと？」

「随分と察しがいいですね」

「私に会いに来るのでもない限り、あんな奥まで人は来ないですからね。それにこれまでも何度か、あちこちの村から追い出されていますから。そういう気配は良く判る」

「……安心して下さい。僕らは、事実関係の調査に来ただけです」

「調査？」

出来上がったコーヒーが、カップに注がれる。

「はい。彼らは貴方がどういった人物なのか、気になっているようです。自分達に害が無いようであれば、このままの状態を維持するつもりだと思いますよ」

「害、ですか」

「……妙な儀式を、行っているとか。モンスターを拾っているとか、そういう噂が流れているようで」

「ああ」

ベイトリオンは小さく笑って、椅子に腰掛けた。ついでにラスク

の入ったかごを、テーブルに置いて言う。

「あながちデタラメでもないですね。儀式は、召喚術の事でしょうし。拾っているのは、モンスターではありませんが」

「では、何を？」

「怪我をした動物をね、保護しているんです」

ベイトリオンは、窓から納屋を指差して言った。

「助かる範囲の動物は、一度保護して、その後で自然に戻しています。助からない動物は、可能な限り、召喚術で蘇生させているんです」

「何故？」

「山暮らしは、一人では寂しくてね。それに、召喚獣は、私を自然の驚異から守ってくれる。お互いの利益になると思ってしているんですが……」

「そうですか……」

「まあ、疑われても仕方ありませんがね……召喚術などを使っていると」

ですが、私はここで静かに暮らせれば、それでいいと思っているのですよ。

ベイトリオンがそう言うと、ウエルも頷いた。

「では、その旨をトゥエル村に伝えておきます。きっと彼らも、貴方を追い出したりはしないでしょう」

「ありがたい」

ベイトリオンは深く頭を垂れて、それから尋ねた。

「ところで、どうして貴方は、額に……？」

「ははあ。冒険旅行に。それは羨ましいですな。いや、若いという事は良いですね」

しばらくの間、ウエル達とベイトリオンは話をした。あくまで、王子云々の話は伏せて、ウエルは旅の目的と、広告収入の事を話す。その間、コルトは珍しく無口に、コーヒーを飲むだけだった。

「今の時代、何をするにもお金は必要ですしね。逆に言うと、お金さえあれば、多くの事はどうにでもなる」

「……そうですね」

ベイトリオンは苦笑しながら頷いた。ウエルの話は金の事ばかりで、ベイトリオンでなくてもウンザリするだろう。ウエルもその自覚はあるようで、特に気にしていない様子だ。

三杯目のコーヒーを飲み干して、ウエルは「さて」と立ち上がった。

「つまらない話ばかりして、申し訳有りません。長居をしてしまいました。僕らも、日が暮れるまでには帰らないと」

「いえいえ、いいですよ。私も久しぶりにおしゃべりが出来て、楽しかった」

ベイトリオンはにつこりと笑って、コーデュを見る。

「美しいお嬢さんにも会えましたしね」

コーデュはその視線に少し困ったが、小さくおじぎを返す。

「清楚な方だ。どこか品格を感じますね。そのピアスも、高価そうですね……もしや、何処か名家のお生まれでは？」

「いえ……私は孤児でしたので……」

「そうですね、それは失礼を……。皆さん、お体に気をつけて、旅行を楽しんで下さいね」

麓まで、フェロネスに送らせましょう。

ベイトリオンとはそうして別れた。

フェロネスが前を歩いている。ユラユラと風に揺れる、紫の体以案内されながらの帰り道。

「コーデュは、本当に名家の生まれだったりしてね」

ふいにウエルが呟いた。コーデュはきょとんとして、ウエルを見る。

「どうして？」

「エルフは貴族が多いし。確かにそのピアスは高価そうだ」

「よしてよ。第一、仮にそうだったとしても、何の意味も無いわ。私は孤児として育ったし。今更何も変わらない。私、もう一九だもの」

コーデュはそう言って、溜息を吐いた。

物心付いた時にはコーデュは孤児院に居た。

メルティーナ王国の偏狭。小さな田舎村に、彼女は捨てられていたらしい。国を挙げて魔術研究を行っているメルティーナに捨てられたのは、コーデュにとって幸運だった。豊かな時代の孤児院である。学校にも行かせてくれたし、食事も部屋もきちんと用意をしてくれた。

コーデュは孤児院に来た時、既にピアスをしていたという。魔術の基礎は既に出来ていて「これは」と思った院長が、魔術学院に進学させてくれた。

瞬く間に全課程を終え、コーデュは国立魔術研究所に進もうとした。しかし、そこでは孤児という境遇があたとなった。彼女は履歴書でふるい落とされ、試験すら受ける事は出来なかった。

それからしばらくは、親が居ないという事を憎み、引きこもっていた。

ある時、友人も孤児と言う理由で職が見つからない、と泣きじゃくっていた。その時に、コーデュは多くの事を考えた。

理不尽という言葉に、甘えてはいないか。

孤児院は孤児である限り、その入居者を保護してくれる。コーデュは二〇歳を迎えるまで、職に就かなくても、食うに困らない。

何も出来ない、何もさせてもらえない。そう思い込んで、甘い殻の中に閉じこもっているだけではないのか。

コーデュは友人と約束し、もう孤児院に戻らない事を決め、そして職を探した。

境遇を乗り越えてこそその人生ではないか。境遇に甘えていてはいけない。もう少し先に進んでみて、それでダメなら、それは境遇で

はなく、自分そのものがダメなのだ。

コーデユはそして、境遇もさるものながら、自分に圧倒的に欠けている物がある事を知るに至った。

彼女は、魔術の事しか頭に無かったのだ。

社会を生きていく方法、効率的な消費の仕方。何もかも知らなかった。

それでは、境遇が変わったとしても同じだ。やはり自分は、受け入れられないだろう。

コーデユはそれらを手に入れるべく、アルバイトに徹していた。

そして、いつか魔術の才能を、存分に発揮する機会を求めて。

今更生まれなど、どうでもいい。貴族だろうがなんだろうが、関係無いと思っていた。

「……」

コーデユはふと、隣が静かなのに気付いて、コルトを見た。彼はとても不愉快そうな顔をして黙っている。

「……コルト？ どうしたの？」

「……うん？ ……ああ、レディ……」

コルトは慌てて笑顔を作ると、どもりながら答えた。

「その、……ああ、そうだ。ルグネスをどうするか、考えていたんだ」

「ああ、護衛さん」

「結局、何の役にも立ちませんでしたね、その護衛」

ウェルが言うと、コルトも唸る。

「どうしたのか……。後で聞いた差しではみるが」

「今のうちにクビを切っておくのも手ですよ。護衛なんていうのは、居るだけで人件費を吸い取る負債ですからね。損切りするのも可能ですし、貴方がその護衛の今後に期待するなら、投資と呼べなくも無いですが……。まあ、良く話し合う事ですね」

「うむ……。しかし……。ううん」

コルトはしきりに悩んでいる様子だった。

コルトを一人きりにさせてやれば、そのルグネスというのも、顔を出してくるのだろう。今日は部屋を三つ取るか、とウェルが呟いていると、フェロネスが小さく呟えた。いつの間にか、村の明かりが近くにあった。

6 投資と損切り

翌日。

トウエル村の一角に有るレストランは、昼時を迎え賑わっていた。テーブルは殆どが埋まっていたが、わずかに空きが出来ては、そこに人々が滑り込む。行列が出来るほどではないが、そこそこの人気のある店だった。

その隅の隅で、コルトとコーデュが昼食を取っていた。

ミートソーススパゲッティとチョコレートパフェ、という奇怪な組み合わせを食べるコルト。三種類のパンとサラダと鳥腿肉のソーを黙々と食べるコーデュ。二人とも、昼食にしては妙な組み合わせだ。

そこにウエルの姿は無かった。

ウエルは朝方「ベイトリオン氏の調査の報酬は、しれたものだったよ。残りの資金を貯めに行つて来る」と昨日とは違う店の広告を額に書いて、そして出て行った。

コルトとコーデュは、旅に必要な買い物をして、後は自由にしたいと言われた。ただし、使いすぎたら働いてもらうよ、と念も押される。

二人は店を巡り、保存食や衣類等を買うつと、昼食を取る事にした。そして、今に至る。

「……そういえば。前から気になってたんだけど」

「うん？ 何だい、レディ」

「レディって言うの、止めてくれない？ ……それで、コルトって、ウエルと知り合いだったの？」

「……どうしてだい？ コーデュ」

ミートボールをフォークで刺したまま、意外そうな顔をするコルトに、コーデュは言った。

「だって、王族ってかなり居るんでしょう？ 例の目印ネックレス

が有ったからって……正確な、何人目の王子かって、判らないと思うけど。実際、ウエルは未だにコルトの番号を覚えてないでしょ。

「ただコルトはウエルが二三番だって、一目で判ったじゃない」

「ああ……ああ、ああ」

コルトはその事が、としきりに頷いて、そして一度黙る。ミートボールを食べて、水を飲み、それから答えた。

「私は二三番……ウエルと面識は有った。しかし、知り合いというほどでは無かったね」

「じゃあ、どうして？」

「年に何度か、誕生会やパーティーが催される。その席には王族の多くが集まるが、あんな奴は他に居なかった」

「……て言つと……」

「王族に、守銭奴なんて種族が居るものか」

コルトは不愉快そうに言つて、チョコレートパフェに手を付けた。どうやら、パフェをおかずにスパゲッティを食べるつものようだ。

「守銭奴……」

「奴は、やれ投資だの、資産価値だの、税率がどうだの、ブツブツと語つて来てな。こんなに金にがめつい奴は見た事が無い、こいつは本物の金の亡者だな、と思った。だから覚えていた。他の王族も、守銭奴と言えば奴の顔が浮かぶはずだ」

どんな凄い演説をしたのかは知らないが、ウエルは王族の中でもかなり特異な存在のようだ。コルトは笑つて言つた。

「それで、それが元で、ウエルは父上に呼び出されてな。特別課題を与えられたのさ」

「特別課題って？」

「王族は『王たる証』として、何かを提出しなければならないが、ウエルはもう一つ課題を与えられたんだ」

「それって、何？」

「金で買えない物。金に替えられない物。プレisstレスを学んで来い、その結果を提示しろ、と」

「……プライスレス」

「守銭奴には学ぶべき言葉だろう。だから私も、愛が一番だって言
ってやるが、どうにも奴は言う事を聞かん」

困った奴だ、とコルトは呟く。アンタも相当困った奴だけどね、
とコーデュは心の中で呟いて、ソテーを口に運ぶ。

確かに、ウエルは変だ。コルトがこれだけ豪遊しているのだから、
かなりのお金は有るだろうに、自分で稼がないと気が済まないらし
い。それは奇妙な話ではあるが、どこか清々しい。

そう考えると、コルトの方がよほど変な人間にも思える。

「……えーと、コルト。なんで貴方は、その、提出を……愛つての
にしたの？」

「君にした理由かい？」

「いや、私かどうかはともかく、愛をテーマにした理由」

さりげなくお断りを入れて尋ねると、コルトは笑んで言った。

「こんな時代だがね、政権争いは凄惨だ。王宮では、三〇人以上の
王族が競い合い、そしてその親類達は、我が子に幸され、といがみ
合いと陰謀を巡らせる」

王宮は修羅場だよ、地獄絵図だ。王妃は皆、鬼ばかりさ。

コルトはそう言いながら、スパゲッティとチョコパフェを交互に
食べている。色んな意味で異様だ。

「まあそんなドロドロの世界で育った私はね、真実の愛って物を見
つけようと思ったのさ。嫉妬もそねみも、なあんにも無い、ただ純
粋な愛つてのをね」

「……それで、ストーリーカー？」

思わず尋ねると、コルトはきよとした顔をして。

「ストーリーカー？ それは何の事だい、コーデュ」

と尋ね返した。

「……」

コーデュはしばらく「ストーリーカー」が何であるか、説明するべき
か否か悩んだが、止めた。事がもっとややこしくなりそうだった。

「……あー……そういえば、ルグネスさんは？　どうするの？」

「ああ……一応、少し減俸で手を打ったよ」

「クビにするんじゃないの？」

「いや……ルグネスにも言い分があつて……」

「言い分つて？」

「コーデュが尋ねると、コルトは溜息を吐いて言った。

「王都クレシユ近辺では手に入らない、珍しいきのこの採取に夢中だつたんだと」

「……きのこ」

「護衛の仕事を止めたら、料理人になるのが夢だそうだね。……食材には目が無くて、ふと気付いたら私が叫んでいたのだが、駆けつける間に全て終わっていたんだそうだ」

「……その、いいかしら」

「何だい、コーデュ」

「普通、雇い主よりきのこを優先するような護衛、即クビになると思ふんだけど……」

「どういう慈愛なの？　それも愛の世界の一種？」

「コーデュが尋ねると、コルトは「うーん」と唸つて、答えた。

「なんというか、説明すると難しいんだが……。私は、その……人間を見ているとね、匂いというか……何かが、判るんだ」

「判る？　……何が？」

「そうだなあ……今までの経験から言えば、「良い」か「悪い」か……つて感じだろうか」

人の目を見ると、大体判つてしまふんだ。

コルトはそう呟いた。

それは、陰謀渦巻く王宮の暮らしが作った、生き残るための技術なのかもしれない。

いずれにせ、コルトはそういった「相手が自分にとってどういう存在か」を一目で見分ける力を持っていた。

それは「彼は　だから××に役に立つ、故に私の味方」というほど明確なものではない。が、なんとなく、伝わってくる。

どちらかというと、「良い」、「悪い」、といった単純な仕分けが行われている、とコルトは言った。

「こいつは「良い」、こいつは「悪い」、と、本能と言うか、生理的と言うか……とにかく、分けているようなんだ。外見とか、血筋とかに関係無くな」

「じゃあ……」

「うむ。コーデュ。君は大変良い。今までに無い好感触だ。だから君を欲しいと思った」

「……その、ルグネスさんも？」

あえて聞かなかった事にして尋ねると、コルトも特に気にした様子も無く頷いた。

「ルグネスも、……ああいうヘマはやらかしても、どうにも「悪い」とは思えない。むしろ、「良い」に分類されていて……出来る事なら、これからも一緒に居たいんだが……」

だが、主が絶体絶命の時にきこの狩りをしている護衛である。いかに勘が鋭いとはいえ、さすがに自分の目を疑わずには居られないようだった。

「……まあ、汚名返上を待つしか、無いわね」

「そうだな……」

「……あら？　じゃあ、ウエルは貴方にとって、「良い」の？　「悪い」の？」

「……それが、難しい」

コルトは溜息を吐いて言った。

「あんな守銭奴は、嫌悪するべき人種だ。金の事しか頭に無い。世の中にはもっといい事が溢れているっていうのに。王宮の中でもない争いはあってね、私はどうも金という奴を好かないが。それにしても哀れな奴だ。……しかし、私はウエルを、「悪い」と感じていないんだ。どうにもおかしい。変だ。勘が鈍ったのかもしれない」

コルトはパイナップルを皿の隅に避けながら、言った。

「もしウエルが「良い」だとしたら、どうしてそうなのかが知りたい。「悪い」なら、私の勘もあてにならない、でいいんだが……どうも、判らない。ウエルとは考え方も何もかも、違うからな」

「まあ、理解し合えないからって、敵同士って事もないでしょうしね」

「うむ……おかしな展開になってしまったが、結局、ウエルについて行くと、私も勘の是非が判る気がするから……。今しばらく、冒険旅行とやらを続けてみようと思う。私自身は働いたら負けだとさえ思っているのだが」

「……それはそれで、やばいけどね……」

少し呆れてコーデュは呟く。ウエルはウエルで問題があるが、コルトはコルトで色々とおかしい。

そんな事をコーデュが考えていると、コルトはふいに顔をしかめた。

「そつえば……彼、ベイトリオン氏は……明らかに「悪い」だったんだが……」

「え？」

コーデュが思わず聞き返した時。

「きゃああああ！」

耳に付く、甲高い悲鳴が、店の外から幾つも上がった。

静かで長閑なトゥエル村は今、悲鳴と混乱でこった返していた。

「なんだ!？」

店の窓に駆け寄り、コルトとコーデュは外を見る。

店の外では、無数の鳥類が村人を襲っていた。人の子供ほどはあろうかという巨鳥が、人々を追い回している。

否、ただの鳥ではない。

「召喚獣、ルヴィエン……」

コーデュが呟いた。

鳥を主体とし、鉱石とヘビなどを組み合わせた召喚獣、ルヴィエン。石の体を持ち、赤い一つ目に視力は無い。代わりに特殊な視野を使って、闇夜でも標的を見つけ出す。偵察や暗殺、拉致に応用される召喚獣だ。

「召喚獣？　じゃあ、ベイトリオンか？！」

「でしうね」

コーデュはすぐに店を出ようとする。コルトも慌てて追うが、「貴方は邪魔だから隠れてなさい」と言われて、大人しく引込んだ。コーデュは静かに店外に出る。すぐ側にあった花壇の裏にしゃがみこみ、魔術式を組み立てる。

石の体を持つ鳥だ。銃や剣は効き難い。音波系魔法で内部から破壊するのが、最も効果的だ。

「助けてえ！」

近くに走って来た女性が叫ぶ。その後ろから、ルヴィエンが急降下してくる。鋭い鉤爪を伸ばし、女性を掴もうとした瞬間を狙って、コーデュは小さく手を払った。

ぴいん、という甲高い音。人間にはそれしか聞こえないが、それはルヴィエンの体を内部から崩壊させるだけの力があつた。

空中で砕けた石が、ばさばさと砂状になって地面に落ちる。女性は振り返って、何事かとコーデュを見る。

「屋内へ、隠れて下さい」

コーデュが静かに言う。こういう時に、落ち着いたコーデュの無表情は有効だった。パニックを起こしかけていた女性も、コーデュの言葉に「は、はい」と冷静さをやや取り戻し、近くの店に避難する。

空には依然、ルヴィエンが飛び交っていた。コーデュはそれらを一つ一つ破壊しながら、村を駆けて行く。

と、

「リュエル、リュエルっ！」

女の叫び声が耳に届いた。コーデュはすぐにそちらに向かう。そ

れらしい女を見つけると、その視線の先を見て、コーデュは思わず舌打ちした。

ルヴィエンが、幼い少女を抱えて飛び去ろうとしている。

「ママー！」

少女は泣きながらもがいているが、ルヴィエンはそれを巧みに押さえ込んで、山へと身を翻す。

コーデュはルヴィエンに狙いを定めたが、魔法を放つ事は出来なかった。既にルヴィエンはかなりの高度に居る。大人ならともかく、子供を放り出すには危険過ぎる高さだった。

成す術も無く、見上げるしかないコーデュをよそに、ルヴィエン達は村から去って行った。母親の泣き声だけが、村に響く。

「……助けに行こう」

声にコーデュが振り返ると、いつの間にか額に「ルバイズ食品店」と書いたウエルが立っていた。騒ぎに気付いて駆けつけたようだ。

「ベイトリオンは無害だと報告した。僕には、責任がある」

ウエルは裏山を見上げて言った。いつになく真剣な表情に、コーデュは「私も行く」と告げる。ウエルが小さく「ありがとう」と呟いた。遠くからコルトが駆け寄って来るのが見えた。

昨日登った山を、今日も登る。

二度目ともなると少し慣れたのか、前回より早く目的地に辿り着いた。

「妙ね、フェロネスが一匹も居ない」

コーデュが呟くと、ウエルが言った。

「罨なのかもね」

「随分気楽に言うわね」

「いずれにせ、行かなくてはならない」

ベイトリオンの小屋に近付きながら、コルトは言う。

「私も不覚だった。あれだけ「悪い」と感じていたのに」

彼なりの勘が、何かを告げていたようだ。けれど、コルトにはそ

の「悪い」の程度までは判らない。何が「悪い」のかまでは、彼に知る事は出来なかった。

「コルトのせいじゃないわ。私もウエルも、彼を疑わなかったんだもの」

「しかし……」

「それより、早く女の子を助けてあげないと。もしかしたら、召喚に使う気なのかもしれない」

コーデュの言葉に、コルトもようやく頷いた。

三人はそつと母屋に近寄り、窓から中を覗きこむ。ベイトリオンは居ない。

「……という事は、納屋かな」

二つの納屋のうち、東の納屋に三人は脚を向けた。こちらは窓が無いので、正面から入るしかない。

ウエルが静かに扉に手をかけて、開く。

納屋の中は薄暗い。本棚がいくつもあり、膨大な量の書物が置いてある。テーブルの上に、一本ろうそくが立っていて、ゆらゆらと辺りを照らしている。

部屋の中を覗き、ベイトリオンや召喚獣が居ない事を確認すると、ウエルは中に入った。続いて、コーデュとコルトも入る。

ウエルは本棚を見上げた。どれも魔術関連の本だった。召喚術の基礎から応用、果ては禁術まで。魔術師シュレグとその一族を記した物。発禁本まである。よくここまで集めたものだ、とウエルは感心してそれらを見る。

ウエルはふと気付いて「シュレグの血」という本の背表紙をじっと見つめる。古びた本には、赤い宝石の絵が描いてあった。

鳥のような金の模様が浮き出た、赤い宝石。

「……まさか」

ウエルが呟いた時、

「！コーデュ！」

コルトが声を上げた。ウエルが振り返ると、コーデュが静かに

床に倒れるのとは、ほぼ同時だった。

「コーデュ、どうした!？」

コルトが声をかけるが、コーデュは返事もしない。良く見ると、左腕に針のようなものが刺さっていた。コルトはすぐにそれを引き抜き、放り捨てるが、コーデュはぐったりとしていて意識も無い。

「コーデュ!」

ウエルもコーデュに駆け寄る。すると、物陰からベイトリオンが歩み出てきた。

「いらつしゃい、皆さん」

ベイトリオンは見るからに凶悪そうな、熊に似た召喚獣を二体連れていた。水の体を持つ熊には、眼が六つある。

「ベイトリオンさん……コーデュに、何をしたんですか」

ウエルが睨みつけて尋ねると、ベイトリオンは肩をすくめて言った。

「まあ、安心して下さい。殺す気はありませんよ」

「なんだと……!」

「あまり下手に動かないほうがいい。ロドツシュ達には、私の身を守るように指示してありますが、不完全なので……。勝手に攻撃してしまうかもしれません」

ベイトリオンは召喚獣……ロドツシュを撫でながら言った。

「……それで、交渉といきませんか」

「交渉?」

ウエルが尋ねると、ベイトリオンは「ええ」と頷いて、手を振った。すると納屋の奥から、一羽のルヴィエンが、少女を抱えて飛んできく。少女もまた、コーデュと同じように眠っていた。

「まずはあの少女。お返ししましょう。ルヴィエンが間違えて攫って来てしまったようです。いや、村の皆さんには悪い事をした。申し訳ない」

ベイトリオンはわざとらしい口調で言いながら、何か袋を取り出す。

「ルヴィエン達の情報は、正しく塗り替えますので心配なさらぬよう、村の方々にお伝え願いませんか。これは心づけです」

ベイトリオンはウエルの側まで来ると、袋を差し出す。ウエルが受け取って中を見ると、金貨が入っていた。

「旅のお供に。必要なのでしょうか？」

ベイトリオンはにっこりと笑って、そしてもう一つ袋を取り出した。

「それと、折り入って相談が。この方を数日、預からせていただけませんか。とって食べたり、殺したりはしませんよ。用が済めばお返します。それなりの金額も払わせていただきます。まあ……お断りになられてもその時は、貴方達がお亡くなりになるだけです」
ロドツシュ達が小さく唸る。ロドツシュは戦闘用の召喚獣だ。直接的な攻撃は一切効かない水の体。一方で水には攻撃力がある。ベイトリオンの言葉はハツタリではない。ロドツシュをけしかけられたら、二人の命は無いだろう。

「そんな話、受けると思っているのか!？」

しかし、状況を知ってか知らずか、コルトが怒鳴る。それを尻目に、ウエルは

「この倍額なら受けましょう」

と答える。コルトは驚いてウエルを睨みつけた。

「ウエル! どういうつもりだ!? こいつは、コーデュに何かする気だぞ!？」 彼女は私達の仲間だろうが!」

「現在の所、投資に見合った成果は出せていませんから」

ウエルは静かに言った。

「こういうのを、損切りと言つのです」

その後、倍額を支払ったベイトリオンに、ウエルは別れを告げた。コルトはコーデュを取り戻そうとしたが、察したウエルは彼を殴る。元々脆弱なコルトは、あっさりと気を失う。

ウエルはコルトを抱えて村に戻り、少女を母親の元へ返し、そし

て村人にベイトリオンの無実を説明した。

村人達は不満そうだったが、事実、怪我人などは出ていなかった
ので、渋々納得した様子だった。

ウェルは宿に戻ると、コルトを寝台に乗せ、そして手元の袋を開
く。

袋いっぱい金貨が、静かに煌いていた。

7 世界はそれを愛と呼ぶ

その時、コルトはまだ一二歳だった。

「お見事！」

広い大理石の鍛錬場に、拍手が起こる。

古いビジョンだ。白黒の幕がかかった、記憶の中の世界。ボンヤリとした五感。

夢を見ているのだ。

コルトは思った。これは、自分が一二歳だった頃の、夢。

アルキーシュ王国の王都クレシュ。その中央に広がる豪華で雄大な王宮ロンドリア。

全ての王族はそこで生まれ、育つ。コルトも例外ではない。

コルトはその頃、剣術を学んでいた。もともと、非力なコルトの事。実用ではなく、見世物としての剣術である。むしろコルトは弓術に長けていた。元々器用だったコルトは、それらを瞬く間に習得する。

そしてその日も、広い鍛錬場でレイピアを構え、剣舞を演じていた。何か見えない物を断ち切るように剣を振り抜けば、顔もおぼろげな剣術指導の教師が、大げさに手を叩く。

「さすが、コルティエ様は何をやっても上達がお早い。母君も、さぞかし誇らしくお思いでしょう」

作り笑いで世辞を並べて、何を欲しがっているのか。

賞賛を受けているコルトは、冷めた目でその教師を見た。

「ならば、是非とも母上から、直々にお褒めに預かりたいものだ」

コルトが吐き捨てるように言ったが、教師は笑みを顔に張り付かせたまま、反応しない。コルトは忌々しげに顔を歪めると、鍛錬場を後にした。

国王の八番目の側室ウエリードの次男であるコルトは、他の王子

と同じように、英才教育を受けている。

しかしコルトは、母を良く知らない。

うんと幼かった頃、母と思われる人物と、手を繋いでいた記憶が有るだけだ。

母であるウエリードは、コルトが六歳の時に誕生した妹に、愛情を注いでいた。妹が誕生して以来、コルトは母に会う事も、ましてや見る事さえも出来ていない。

コルトは必死だった。母に会いたいという思いは強く、母が望んでいると知れば、どんな難しい学術書でも読み、特に興味は無かったが、ダンスや剣術にも精を出した。

けれど、どれほど努力しても、幾つ成果を並べても、母はコルトに会いに来てはくれなかった。

「コルト様、お召し替えをなさいますと、風邪を引きますよ」

自室に戻って、そのままベッドに倒れこむ。と、すぐに現れて、着替えを差し出して来る人物。黒髪の少年。ルグネスだ。

「お前は律儀だな。だが他の連中と違って、作り笑いをするような奴でもない」

「お気に召しませんか」

「いいや」

コルトは苦笑して身を起こす。ルグネスから着替えを受け取る。

と、ルグネスがすぐに出て行こうとしたので、コルトは思わず呼び止める。

「ルグネス」

「は……」

「随分素っ気無いな」

「お着替えを見るのは、失礼にあたるかと……」

「ああ、まあ……それはそうだが……ルグネス、一つ聞いていいかな」

「何でしょうか？」

「お前は、両親に会いたいと思うか？」

コルトがブラウスを広げながら問うと、彼は小さく首を傾げて答えた。

「生憎、思った事がございません」

「本当か？ 本当に、一度もか？」

「はい」

「では、私は弱い人間なのかな。……こんなにも、母に会いたいと思うのは」

コルトが苦笑すると、ルグネスは首を振って言う。

「私は、元々両親を存じません。身の回りに両親というモノがありませんので、羨ましいとも思いません。それだけです。恐らく、知っているならば、恋しいのは当然でしょう」

「そうかな」

「恐らく、ですが……。私は、コルト様に拾っていただいた身。私にとつては、コルト様が両親のようなものです」

「よしてくれ、そんなに歳は変わらないじゃないか」

コルトは苦笑して、そして俯いて言った。

「私は両親から離されて、お前は捨てられて。この世は、愛に欠けているな」

「……コルト様がおっしゃられるならば、そうなのでしょうね」

「……ルグネス。私は、王になるぞ」

突然の宣言に、ルグネスは首を傾げる。コルトは顔を上げ、ルグネスを見つめた。

「愛の国を作るんだ。親の愛を知らない子が居ない世界。互いが互いに愛し合う世界。いいだろう」

「はぁ……」

「良くないか？」

「判りません。私は、愛と言う物を存じませんので」

「つまらない奴だな、ルグネスは」

コルトは溜息を吐いて、それから言った。

「いずれにせ、ルグネス。お前さえ嫌じゃなければ、ずっと私を支えていてくれ。私が心を許せるのは、なんだかんだ言って、お前だけだから」

私が王になる道を、助けてくれ。

コルトが言うと、ルグネスは大きく頷いて。

「私の命が果てるまで、お供する覚悟です」
と言い切った。

「……お前、古い奴だな」

「良く言われます」

「……まあ、嫌いじゃない。ありがとう。……着替えるから、出て行ってくれるか」

「御意」

ルグネスは礼をして、踵を返す。その背中に向かって、コルトは言った。

「おい。その、命をかけるぞってのが、愛って奴かもしれないぞ、ルグネス」

「……」

ルグネスは一度振り返ってコルトを見ると、目を僅かに細めて、出て行った。

「……愛の世界。いいな。思いつきだけど、なんだかいいな。……まずは、いい嫁を捜さなきゃいけないが……」

コルトは先ほどまでの憂鬱を忘れて、楽しそうに呟きながら、着替えを始めた。

夢はそこで場面が変わる。

何年も前の出来事が、昨夜と繋がる。

「一生の不覚です、コルト様。何なりと処分を」

夜になると、天井から出て来たルグネスが、静かに頭を垂れた。

「……一応、言い訳を聞こう」

コルトが言うと、ルグネスはしばらく悩んで、答えた。

「きのこを……」

「何？」

「きのこを、採ってありました」

「……」

あまりといえばあまりの理由に、コルトは啞然としてルグネスを見る。

「……私より、きのこが大事か」

「いえ、そうではなく……その、この辺りは、王都とは気候が違って、……図鑑で見られないような、珍しいきのこが、群生しております。私は、不肖ながら、料理人に憧れておりまして……それで、思わず、こう、夢中で……」

「……きのこ狩りをしていた、と」

「は、はい……」

「……」

「……」

コルトは何も言えなかった。何年も生活を共にしてきたルグネスが、自分よりきのこを優先したのである。それはコルトにとって、かなり悲しい事態だ。

しかし、ルグネスの方も反省しているようだ。成長しても中性的な顔立ちに、影が差している。いつも静かではあるが、今の彼はとても沈んでいるのが良く判る。

「……料理人か……」

「はい……引退したら、料理を作りたいと思っております……」

「引退、な……」

コルトは溜息を吐いて、ルグネスを見た。

ルグネスは幼い頃、孤児だった。それを偶然拾い上げたのがコルトだ。コルトは同じ年頃のルグネスと共に成長した。王族給付金を分け与えて、コルトの不得意な戦闘の技をルグネスに学ばせ、護衛として取り立てた。

長い年月を共に過ごし、本当の兄弟よりも近い人間だとさえ思っ

ている。

だからこそ、今回の事は驚いた。が、その兄弟の夢をどうしてコルトが否定出来るだろうか。彼は彼なりに夢を抱いて生きてきたはずだ。彼はルグネスであって、コルトの護衛として生まれてきたわけではないのだから。

「……次回に期待するよ。今月の給料は減俸する」

「……ですが、」

「いい。気にしてない。私とお前の仲だ。今回の事は、忘れる」
でも、次はちゃんと助けてくれないと、困るからな。

コルトが言うと、ルグネスは力いっぱい頭を下げて言った。

「このルグネス、コルト様の御為に、命を捨てる覚悟です！」

そしてコルトは苦笑して、言う。

「死ぬ事はない。私が作る愛の世界……そこに、お前も居て欲しいんだから。……そうだ、私が王になったら、お前を料理人として召してやつてもいいぞ。だから、その時まで生きている」

でないと、何をやっているか判らない。

コルトがそう言ってやると、ルグネスは顔を上げて、そして僅かに目を細めた。

だのに、愛の世界を作らなくてはいけないのに。

今日、私はコーデュを救えなかった。

口ではあれだけ愛を語って、命を捨てると言い張ったのに、守れなかった。

……否、まだ遅くないはずだ。

コーデュを助けて、式を挙げて、愛の世界を作らなくてはい

コルトは強く思い、そして目を開けた。

コルトが眼を覚ましたのは、その日の夕方だった。

「コーデュ！」

叫んで飛び起きると、そこは宿屋の一室。コルトはベッドに横たわっていた。慌てて辺りを見渡すと、ウエルが荷物を整理しているのを見つける。

「ウエル、貴様！」

コルトは思わずウエルに飛び掛っていた。ウエルもなすがままに床に叩きつけられる。コルトはウエルの胸倉を掴み上げると、怒鳴った。

「お前は、何処までも腐った奴だ！ そんなに金が大事か！ コーデュとのこの数日は、たったそれだけの金で売り飛ばせるものか！？」 お前に人の心つて物は、無いのか！？」

コルトの視線の先には、机。その上には、金貨が積まれている。たったそれだけの金。そう見えますか」

「何い？」

「貴方は金のなんたるかが、何も見えてない。そればかりか、貴方の生き方は見るも無残なほどに非効率だ。哀れみさえ覚えますよ」

「哀れだと！？」

「愛だなんだと言いながら。その貧弱な腕で何を守れますか。愛で何が出来るんです。愛だけでは、コーデュを救う事も、まして自分の身を守る事も出来ない。貴方は口先ばかりの現実逃避者に過ぎない。しかも、自分を美化した」

「黙れ！」

コルトはウエルを殴りつける。元々非力なコルトの力では、ウエルに怪我を負わせる事は出来ない。しかし、ウエルの頬は赤くなったので、痛みはあっただろう。

「哀れなのはお前だ！ 人を売る、それは人間として最低の行為だぞ！ お前は人間じゃない！ お前と同じ血が流れていると思うと、虫唾が走る！」

「それはありがた事で」

「ウエル！ ……っ、もういい！ 私はコーデュを助けに行く！」

お前は金貨でも数えている！」

コルトはそう言い捨てると、ウエルから離れた。ウエルは静かに立ち上がって、出て行こうとするコルトを呼び止める。

「兄さん」

「なんだ！……っ、え？　今、お前、兄さんって言ったか？」

ウエルの口から出るはずの無い言葉に、コルトは怒りを忘れて振り返る。ウエルは真剣な顔で、コルトを見ていた。

「兄さんには、慎重さや、憂慮が足りてない。少し話し合う必要がある」

「そんな時間は無い。早くしなければ、コーデュが……」

「ベイトリオンは召喚師。コーデュを使って何かをやるとすれば、召喚術。人間を使った召喚には、一日ないし二日かかる。僕達はその術が完成するまでに、コーデュを助ければ問題無い。まして、相手はロドツシュなどの召喚獣を引き連れた強敵。兄さんがいくらレイピアを振り回しても、勝てっこない」

「……しかし」

「勝つ方法があります。二人でなら。ここまで言えばお判りでしょうが、その二人は、兄さんとルグネス君ではない。兄さんと、僕だ」

「……」
思い当たる事が有ったらしい。コルトは息を呑んで、そして舌打ちした。

「……それで、話し合いとは？」

「時間は有る。だから、まずは兄さんとの溝を埋めなくては。『アレ』はお互い信頼が無いと、使えないから……」

ウエルは椅子を差し出して言う。コルトはしばらく悩んだが、やがて椅子に腰掛けた。

「とりあえず、僕がこういう性格になった理由について、話しておくべきでしょうね」

ウエルもまた椅子に腰掛け、静かに語り始める。

「まず、最初に。僕は小さい頃、貧民の少女と出会いました」

「……貧民？ 王族のお前が？」

「僕の母はご存知の通り、平民の出自です。だから母は僕に、平民の暮らしも教えようと思ったのでしよう。買物物の仕方等を学んだら、庶民の中に紛れ込んで数日を過ごした事もあります」

「ふむ……変わっているな」

「ええ。……その頃、僕は速算力を高めるために、海の果ての小国で使われているという、暗算の秘術を学んでいたのです。こう、珠を幾つか用意して、その位置を入れ替える方式なのですが……ともなく。その時に、件の少女を見ました。塾の隣の家に住んでいた少女で、話した事ありませんが」

「それで？ その少女がどうした」

「彼女は病気でした」

「ウエルはそこでふと言葉を区切り、先ほどの金貨を見て言った。

「僕達王族にとっては、これは些細な金です。しかし、平民にとってみれば、何年も苦労して貯めるもの。……僕達のように、熱が出れば医者に行ける立場の者から見れば、彼女の病気もまた、些細なものでした。けれど彼女は幼かったし、その家計は苦しく、蓄えも無かった。見かねて僕が薬を買い、届けに行った時、彼女は棺の中に居ました。薬を三日も飲めば完治する病気だったんですがね」

「……医者にも行けぬのか、貧民と言うものは」

「貧民はおるか、庶民も難しいでしょうね。殆どの人間は金銭の不足から、何らかの不幸を抱えています」

「ふむ」

「コルトは腕を組んで考える。

「コルトは生まれも育ちも貴族で、ダンスや剣術を学び、社交界の上手な渡り方を手に入れた。けれど、平民の事を考える機会は殆ど与えられなかった。

「今でこそ王宮を出て遊んでいるが、数年前までは、王宮の暮らしが普通だと思っていた。初めて庶民の生活に触れた時、なんと不便

な所だろうと、コルトは思った。どうしてこの不便さに甘んじているのか、全く理解出来ない、と。

それは、甘んじているのではなく、どうにもならない現実なのだ。と気付くには、しばらくの時間を要した。平民の孤児だったルグネスも、コルトに世界の広さを教えてくれた。

コルト達はあくまで、ほんの一握りの特殊な人間に過ぎないのだ。「そこで僕は考えた。人の不幸には二つある、と。一つは、金で避けられるもの。そして残りが、避けられないもの。兄さんを含め、多くの人は僕を守銭奴と蔑視します。それも事実でしょう。しかし世界には、金が無い故に起きる不幸が有ることもまた、確かな事実」「うむ」

「ならば、金が無いにも関わらず、求めようとしない人は、自ら不幸を享受しているという事です。そんな愚かな事はありません。家で例えるなら、風に吹かれなくてすむというのに、景色が見えなくなる」と壁を作らないようなものです」

「判りにくい例だな……まあいい、それで？」

「僕は金が欲しい。それを恥じない。何か物が欲しいからではなく、金で消せる不幸が欲しいから。僕にとって金は、魔だけです。お守りと同じです。ただ僕は、教会に行つてそれを買つ代わりに、サイフを膨らませているだけなのです」

「……」

コルトは悩むしかなかった。

全く違う価値観に触れる、というのは、そういう事だ。理解するにしろ、しないにしろ、不快になる。極めて不愉快な事だ。

しかし、コルトはウエルの価値観を、笑って跳ね除ける気にはなれなかった。

これは、ウエルが自分に心を開こうとしている瞬間なのだ。何かを伝えようと、何かを判り合おうとしている。ウエルは確かに、その努力をしようとしている。

コルトはその努力を無にしてしまうほど、ウエルの事を嫌いでは

なかった。何しろ、彼の勘はウエルを「良い」と評価しているのだから。

「……それで、お前。王族給付金をどうした。確か、持っていないだろう」

「ええ。あれは投資に回しました」

「投資？」

コルトが尋ねると、ウエルは頷いて、説明した。

世にある不幸の源泉は、金に違いない。

けれど、世にはもう一つの不幸も常にある。

それは無知という事だ。

無知とは、文字が読めない事にとどまらない。難しい数式を解けない事だけではない。

全てを知らぬ人間は、どこまでいっても無知。極言すれば、人間は生きている限り無知なのだ。

病気を知らぬから、手遅れになる。生物学を知らぬから、害獣を駆除して、益獣が減ぶ。

正しい知識と生活が結びついてこそ、人は上手に生きてゆける。学校はなにも、偏差値のために有るのではない。一生に渡って続ける勉強の、準備をしているのだ。

「一度やってみて懲りたのですが、貧民にいくら金を与えても、すぐに無くなるだけなのです。彼らはまた飢えた貧民に戻る。だから僕は、彼らに金を与えるのではなく、金の知識を差し出す事にしました」

「金の知識？」

「兄さんなら判ると思いますが、金は放っておけば無限に減っていく物です。その減少を、人は食い止めようとしません。穴の開いたバケツに、次から次へと水を注ぐ。つまり、収入を増やそうと努力します。彼らは、馬車馬のように働き続け、金を減らし続けます。そうしている限り、貧民は貧民でしかありません。不幸はいつまで

も続くでしょう」

「とすると……お前はどつするんだ？」

「バケツの穴は塞げませんが、小さくする事は可能です。この世の全ての知識に、穴を埋める力があります。僕は、その事を貧民に教えようと思い……学校を、建てました。いくつか」

「……いくつかつて、お前、まさか……」

「ほぼ全額、その資金で使い切りました」

「ウエルがきつぱりと言う。コルトはあまりの事に、眼を丸くするしかない。」

「まあ、僕も馬鹿ではありませんから、残りの資金は運用していましたが。元本に手を付けないのは投資の基本ですからね」

「……」

「そういうわけで、僕は金が欲しいんです。とにかく欲しい。だから、コーデュの事を損切りと言ったのも、あながち嘘ではありません。彼女は今まで、金を使う事しかしていませんでしたから」

「……」

「コルトはしばらく悩んで、そして「うむ」と一度頷くと、言った。ウエル。お前の言う事にも一理ある。だからこそ、私は否定ではなく、反論をするぞ。いいか、不幸は三つある。お前の言う二つの不幸、それと、金がある不幸だ」

「……」

「私は金のおかげで裕福に育ったが、その反面、確かにお前より無知だ。確かに私は、穴の開いたバケツを抱えて、知らぬフリをしていた。となれば、金よりも不幸を呼ぶのは無知の方だろう。無知は金が無いから起こるわけではない。無知は、ただひたすらに不幸だ。それは認める」

「そうですか」

「だがな、ウエル。その上で私は、お前の無知を非難するぞ。コーデュは私にとつても、お前にとつても大事な人だ。何故なら、仲間だからだ。それを売るのは、お前の利益じゃない。損だ。それに気

付けないお前は無知だ」

「……」

「例え、危険が有ったとしても、仲間を見捨てるような事をしてはいけない。お前の理屈は判るぞ、あの状況は確かに危険だった。けれど、もうコーデュはお前を仲間だと思わないかもしれない。そうなれば、お前は折角見つけた仲間を失う事になる。それは明らかに損失だろう」

「……」

ウエルは黙ってコルトの言葉を聴いていた。ウエルもまた、コルトの努力を受け入れようとしているのだろう。

「お前は事有るごとに、投資だのなんだのと言う。なら、コーデュもまた投資だ。なのに、一緒に居て何日も経たないのに、こんな事をして。それは本当に愚かな損切りだ。もっと長い眼で見るのが、お前の言う投資だろう。コーデュを助けに行くぞ。そして、彼女にしっかりと謝れ。その後、たくさんの事があつてから、コーデュをどうしようとお前の勝手だ。その時は私が娶るから」

さりげなく主張しながらコルトは言う。

「彼女を助けよう。そしてお前はプライスレスを探せ。必ず見つかるはずだ、彼女と居れば」

「……そうですね、僕もそう思います。何せ、彼女は只者じゃない」

「……うん？ 何の話だ？」

突然の話題の変化にコルトが尋ねると、ウエルは答えた。

「コーデュは、真正正銘、シュレグ一族の末裔なんです」

「……な？」

コルトはきょとした顔をする。何故そうなるのかが判らない様子だ。

「彼女のピアス。どこかで見たと思うはずですよ。赤水晶の中に浮かぶ金の鳥。フェーレルビー。シュレグ一門の魂を受け継ぐ、血を吸うピアス」

「あ！ そういえば……古い伝承だから、すっかり忘れていた」

「シュレグ一門は絶滅したはずですからね……恐らく、分家の末裔なのでしょう」

魔術師シュレグの一族は、その殆どが消された。

現在の国王達の祖先、四人の戦士達は各々、特殊な能力を使い、彼らに打ち勝った。彼らを大いなる青き洞穴、ゴルドウーンに追いやり、封印したという。

その後、シュレグの血を継ぐ者達は、執拗な攻撃を受けた。しかし幼い子や、身重の女、関係者だが、悪意の無い者達は生き延びる事を許された。

代わりに血の呪いを彼らは受けた。一目でそれと判るよう、彼らには生まれた時からフェーレルビーが付与する。決して外れないように、本能に枷をした目印だった。

しかしその目印は、彼らを弾圧するに充分だった。フェーレルビーの持ち主は、シュレグの血を引く者と迫害され、時には事故という名目で消された。

そうして、今やフェーレルビーの示す物が何であつたかさえ、人々の記憶から消えていた。

「彼女は本当の意味で投資です。僕も彼女を失いたくない。彼女は自覚の無い逸材だ」

ウエルは笑って言つた。

「一緒に、助けに行きましょう。兄さん」

その言葉に、コルトは大きく頷く。初めて二人の利害関係が一致した。

「でも良かったですね、兄さん。やっぱりお金は大事ですよ」

「何？ どうしてそんな話になる。プライスレスを探すために、コデュを助けに行くのだろう」

「だって、考えてもみて下さいよ。兄さんとルグネス君では、ベイトリオンには対抗しきれないでしょう。兄さんは重火器にも詳しくないし。でも、僕が本当に金に困っていたら、この金を手放せませんから、コデュを見捨ててしまったでしょう。僕は金に困ってい

ないから、兄さんに協力する。兄さんはコーデュを助けられるかもしれない。ほら、僕に金が無かったら、こうはいかないでしょう？」

「僕は何も、金が一番でそれしか無いと思っているわけではないんです。ただ、必要であり、上手に付き合わなくてはならない金という物に皆、あまりに無頓着だ。僕は少しでもいいから、金という物が何であるかを考えて欲しいだけなんですよ」

「……ふん。……これが無事済んだら、考えてもいいぞ」

「是非、お願いします。……まずは、武器を買い揃えなくては」
ウエルは机の金貨を手にとると、コルトを手招いて宿を出た。

8 ベイトリオン

時は今より、一〇年の月日を遡る。

その頃、ベイトリオン・クレッセルはキャドゥー王国に住んでいた。当時キャドゥーは鉱山地帯で、未発達の間も多くあり、それゆえ物価は安く、暮らし易かった。

ただしそれは、一般人に限る話だ。その時から、キャドゥーでは他の地方よりも魔術は敬遠され、魔術師は職を持てなかった。

メルティーナ国立魔術研究所に入れなかったベイトリオンは、召喚師としての道を諦め、ひっそりと暮らしていた。そんな頃、ベイトリオンは暗黒魔術の先進研究者に出会い、その考えに傾倒し、再度魔術の道を歩く事を決意する。

ベイトリオンは暗黒魔術の研究を独自で進めていった。その時出会ったミーティアという魔術師の女性と意気投合し、結婚する。間もなく息子に恵まれ、エルバと名付けた。

ベイトリオンはひっそりと自宅にこもり、研究を続けた。世間に忌まわれる魔術を、現代に於いても受け入れられるよう、改良を続けていた。しかしそれは困難で、作業は思うようにはかからない。いっししか妻のミーティアは魔術を捨て、勤労するしかなくなった。

その姿を近隣の人々はどう見たのだろうか。ただでさえ魔術師は敬遠されていた。ベイトリオンは日夜研究に明け暮れ、外に出る機会もあまり無い。息子のエルバも魔術を直々に教えられていたため、近隣住民との関係は疎遠だった。

そんなある日の事。妻のミーティアは息子のエルバを連れて、買い物に出かけた。ベイトリオンは一人家に残り、研究を続けていた。夕方になり、帰りが遅い事を案じたベイトリオンは、作業を止め、家を出る。

そして彼は恐ろしい事実を知った。

開発中の機械が鉱山内で事故を起こし、火災等で数十名が犠牲になったという。町中が大騒ぎをしていたが、ベイトリオンは研究に没頭するあまり、それに気付かなかった。

まさか。

彼は妻と息子の姿を捜した。事故は悲惨なものだった。どうやら爆発を起こしたらしい。鉱山の中で爆ぜた炎は、そのまま坑道の中を焼き尽くし、居場所を無くして街に噴出したようだ。商店街の一角は焼け落ち、見る影も無い。肉の焼ける匂いにむせそうだった。衝撃があつたのか、幾つかの棟は崩れている。その側に、死体が安置されていた。

ベイトリオンはそこに駆け寄り、妻と息子を捜す。

妻の姿があつた。

変わり果て、そこに横たわるだけの妻に、ベイトリオンは声も無い。全身から力が抜け、崩れ落ちそうになりながら、彼は気付く。

息子が居ない。

未だに建物の下敷きになっているのか、はたまた生きているのか。息子の姿は死体置き場には無かった。

ベイトリオンはひとまず妻のもとを離れ、息子を捜した。

まだ生きている人間が病院に運ばれて行くのを見て、ベイトリオンはそこに向かった。

そこにはエルバも居た。まだかろうじて呼吸をしている。救護班に瓦礫の中から救助され、意識の無いまま治療待ちの棚の中に入れられたようだった。

「エルバ！」

ベイトリオンは息子に駆け寄り、声をかける。が、エルバの顔色は青ざめ、返事はない。呼吸はかすかで、今にも止まってしまいうだった。

「誰か、息子を、エルバを助けてくれ！」

ベイトリオンは医者と思わしき人間に叫ぶが、受け入れられない。

「その子よりもつと重篤な人々が大勢居ます。そちらが先なんです」
「このままでは息子は死んでしまう！……そうだ、お金ならいくらでも出します、どうか息子を、エルバを……！」
そう叫ぶベイトリオンを医師は鼻で笑って言った。
「おたく、魔術師でしたな。ご自分で治療なされたいかがですか」
人々の目は、魔術師であるベイトリオンに、ひたすらに冷たかった。

ベイトリオンはそれから長い間医師に訴えたが、結局聞き入れられなかった。死に逝く息子の手を取り、ベイトリオンは覚悟を決めた。まだ息の有るエルバを運び、自宅へと戻る。

魔術も金も人情も、何もかも役に立たない。全て意味が無い。
ベイトリオンはそして禁断の魔術式を展開した。
それは何年も前に自ら捨て去った、召喚術だった。

ガタリ。

物音にベイトリオンは目を覚ました。見ると、そこはトゥエル村の裏山。現在のベイトリオンの家だった。窓からはうつすらと明かりが差している。朝のようだ。

古い夢を見たものだ。ベイトリオンは苦笑して、そして物音のした方に目を向ける。

暗がりに、大きな影が立っている。

「……ああ、おはよう、エルバ」

ベイトリオンはにこりと笑って言った。

「朝ごはんにしようか。この世界の終わりを前に、良い食事を楽しもう」

その時、コーデュは何も無い空間を漂っていた。

否、闇はあった。ただひたすらの闇。その中でコーデュは、波に漂う木っ端のように、ゆらゆらと浮いている。

（ここ、何処だろう……）

闇の世界は、少し懐かしさを感じさせた。胎内のようでもある。

コーデュはやりわりと体を動かし、歩いてみた。そこには地面というものも無い。ふわふわと揺れるだけで、先に進んでいるのか否かも判らない。

コーデュはしばらく辺りを見渡したが、何も変わらなかった。仕方なく、ここに来るまで何をしていたかを思い出そうとする。

少女が攫われた。助けに行った。納屋に入った。左腕が、チクツとした。

コーデュの記憶はそこで途切れている。気付けば、ここに居た。

ここが何処なのか考えるが、こんな場所は文献に載っていないかった。……いや、思い起こしてみると、似たような場所の記述は、あった。

混沌。

全ての物が等しく集い、また自ら形を成さない場所。魔術が絶対に干渉出来ない場所。あるいは、シュレグが最後に干渉しようとした、究極の空間。

全てが集い、無限に存在する。この空間を魔術式と結合出来れば、それは世界を変えるほどの力になる。いわばそれは、賢者の石。無の空間から、物質と現象を構成する、最強の魔術を作り出せる。

シュレグは世界を牛耳る前に、それを求めた。ひたすらに混沌を探し、結合しようとした。結果、その隙が彼らを世界の玉座から引きずり落とす事になった。

混沌の研究に没頭している間に、四人の戦士が彼らの一族を追いつめ、封印するに至ったのだ。

シュレグは求めすぎた。混沌とは、この世に存在しないものなのだ。理論上にしかないものだった。

けれど。

（じゃあ、そこに漂ってる私って、何）

コーデュは思わず自分につっこみを入れる。これは夢に似ているが、違う気がする。ここは夢とは全く異なる空間のように思う。

（待って、記憶が途切れてる。という事は、私の身に何かあった。現実世界で突然、こんな所に来るわけないから……）

コーデュは冷静に冷静に考えて、そして、思いついた。

（あ、もしかして、死んじゃった？　なんてねー、なんて、なんて……）

冗談のつもりで考えてみたが、あながちそうでもないとも言いつれない。何せ、生きているという確証も無いのだから。現に、コーデュには自分の鼓動が聞こえなかった。胸に手を当てても、首を押さえても、鼓動は感じられない。

（……ま、まさか……まだ何もやってないわよ、私。まだ人生、ものすごく途上よ。ここで死んだら、私の人生、ほんっとーに無駄。嘘よね、嘘と言って）

コーデュが思わず顔を青くしていると、

「大丈夫、ここは死じゃないよ」

と、声がかかった。

驚いてコーデュが振り返ると、そこには少年が立っていた。

否、少年のシルエツト、と言うべきか。白色の光の線がそこにある。髪の毛の先まで繊細に描き出された輪郭。少年の中も深い闇で、彼の動きだけが、ゆらゆらと光の軌跡で浮かび上がっている。

「やあ、コーデュ。僕はエルバ。安心して。ここは死じゃないよ」

「……じゃあ、混沌かしら」

「どちらとも言えないなあ。僕も、こここの事は良く知らないんだ」
エルバは明るく言う。揺らめく体で、彼はコーデュを励ます。

「大丈夫だよ。きつと、彼らが助けに来てくれるから」

「彼らって、誰？」

「ほら、ずっと一緒に居たじゃない。お父さんは知らないみたいだ

けど、僕、判ってるんだ。彼ら、王子でしょ？ それも、アルキーシュの。ずっとここで待ってたかいがあったよ。僕はやっとここから出れるんだ」

「……どうして、王子だと判るの？ それに……ここから出れるって……？」

コーデュが尋ねると、エルバは言った。

「僕は、召喚獣の部品にされてるんだ。、精神だけがここに取り残されてる。コーデュもそうだよ。僕はここに漂いながら、一二個の眼で世界を見てるんだ。それでずっと待ってたんだ」

「何を？」

「お父さんを、……ベイトリオンを、殺す人が来るのを」

エルバは嬉しそうな声をあげて、笑った。

ウエルとコルトは装備を整えて、翌朝、再度山に登った。

あれからすぐに召喚術を始めたとしても、夕方までは完成しないだろう。逆に、日暮れまでにコーデュを助けなければ、彼女は召喚獣になってしまう。

相手は召喚師。それも、ロドツシュのような大型召喚獣を作れる人間だ。何も考えずに戦っても勝てる相手ではなかった。

コルトは古風に弓とレイピア、小さな盾を用意した。ウエルの方は、小さな銃と大きな盾を。

そして。

「うむ。ルグネス、頑張ってるなあ」

先行したルグネスは、偵察のフェロネスやルヴィエンを破壊していた。

今度しくじればクビだと思っているのだろう。召喚獣相手には魔術が有効である。多少心得のあるルグネスは、不慣れながらも魔術を駆使し、露払いをしていた。ベイトリオンの小屋に着くまでに、数十匹の残骸を見かける。が、ついにルグネス本人の姿は見えな

った。

「ベイトリオンとは戦うな、と忠告しておいたから、まあ上出来だな」

「彼も召喚師と戦うリスクは理解しているのでしょう。あとは兄さんが死にかけた時に、庇いに来るか否かですね」

「そうだな、庇いに来るか否かだな」

コルト達はわざと大声で言いながら、ベイトリオンの住居へと近付いて行った。例によって、家には誰も居ない。前回と同じ東側の納屋を覗いたが、そちらも空っぽだった。

となれば、残った西の納屋。

二人は納屋に近付き、扉を開けた。

木の床に、大きく赤い魔法陣が書かれていた。その中央に大きな机があり、コーデュが寝かせられていた。

「コーデュ！」

コルトが思わず駆け寄るが、魔法陣からは何らかの結界が発生しているようだ。コルトはあと一步のところで、コーデュに触れられない。

「ダメですよ、邪魔をしては」

ベイトリオンの声がした。はっと二人が天井を見上げると、梁にベイトリオンが腰掛けている。そしてその隣に、異様な物が立っていた。

人の子供ほどの大きさで、背からは大きな蝙蝠の羽。胸から腹にかけて、一二もの青い眼が輝き、両腕からは鎌状になった骨が生えている。顔は明らかに人間だ。

「リドルエル……」

ウエルが思わず唸った。

リドルエルは人間を主体とした召喚獣だ。腕から生えた骨の鎌で命を刈る、空飛ぶ人。死神とも呼ばれている。

「山里に隠れて、人体実験を行っていたとはね」

ウエルが言うと、ベイトリオンは肩をすくめる。

「実験とは悲しい。これは蘇生術ですよ。おかげで息子は、こうして今も元気に、私と苦楽を共にしてくれているのです。なあ……エルバ」

ベイトリオンはリドルエルを見て、言った。

「さあ、エルバ。お客人にご挨拶を。山歩きにお疲れだろうから、楽に殺して差し上げなさい」

リドルエルはゆっくりとはばたき、そして急降下してきた。その腕の骨でウエルを薙ぎ払う。

「っ！」

ウエルは大盾で身を庇ったが、リドルエルのあまりの力に吹き飛ばされ、納屋から転がり出る。

「ウエル！ うわっ！」

ウエルを助けに行こうとしたコルトは、水の腕が飛び出て来るのを、すんでのところでかわした。見れば、ロドツシュが二体、こちらに歩いて来ている。

「私って、つくづく熊にもてるな」

コルトは思わず呟いて、弓に矢をつがえた。

「……どうして、お父さんを殺す人を……待ってるの？」

コーデュが尋ねると、エルバは笑って答えた。

「僕が終わるから。僕はもう死んでるんだ。だけどお父さんは、僕をここに繋ぎとめてる。なのに、話を聞いてくれない。僕の声は届かないんだ。もう僕には、どうしようもない。もう、楽になりたい。お父さんにもね、楽になって欲しい。もう、悲しまないでって、言いたいのに、伝わらないんだ」

エルバは小さく溜息を吐く。

「僕はお父さんを恨んでないよ、死ぬ事は怖くない。だから……お父さんは、僕の分まで、生きてよって、言いたいのに。……悲しい事ばかりじゃないよって言うのに、聞いてくれないんだ」

だから僕は、お父さんを殺す人を待っていたんだ。

エルバはそう言っで、そしてコーデュに手を差し出した。

「さあ、コーデュ。出口に行こう。君なら大丈夫。僕とは違って、とつても力がある。君が強く念じれば、ここから出れるはずさ」

「でも……どこを見ても同じよ？ 出口なんて……」

「諦めちゃダメ。諦めると、出口は消えてしまうんだ。信じて歩き続けないと、辿り着けないんだ」

エルバはコーデュの手を握って歩き始めた。コーデュも仕方なく、闇の中を歩いて行く。

闇は何処までも続く。本当に出口などあるんだろうか。コーデュは思わず疑ってしまう。

「だめだ！」

エルバが叫んだ。しかし既に遅かったようだ。コーデュが顔を上げると、エルバの姿は無い。

それどころか、先ほどまでよりも一層、闇は濃さを増し、纏わり付いているようにも見える。

「エルバ……？」

名を呼んでみるが、返事は無い。辺りを見渡していると突然、人影が現れた。

それは以前見た事のある人々だった。

『ちくしょう、魔術が何だ、魔術で何が出来るっていうんだ』

何人もの人間が周りに突っ伏し、嘆いている。コーデュはその光景を知っていた。

魔術師を必要としない現代で、埋もれていった同族達だ。

世の中を、あるいは魔術そのものを憎み、恨み、そして結果的に埋もれていった人々。

あらゆる変革を望まなかった者達だった。

『コーデュ、お前もこっちの人間だ』

一人の男が、コーデュを見て言った。

『魔術師なんて、もう要らない。お前がどんなに夢見ても、そんな

時代は来ない。歩いてても無駄だ。全ての魔術式は既に完成し、お前の切り開ける分野も無い』

『そうだ。第一、お前は魔術を志しながら、何をやっている。一般市民にまぎれて、働いて、金を儲けて。お前も私達と同じだ』

『ここにおいで、ここはとても気持ちがいいよ。もう、夢に追いかけられる事がないんだ』

彼らはコーデュを手招く。コーデュは何か、目に見えない力で、そちらに引つ張られていく。

「嫌よ。私、まだ諦めたくないの」

『諦めは早いほうがいい。人生に響くからね。若いうちなら、どんな風にも生きていけるが、それもあと何年続くか……』

『夢ばかり追いかけて、夢に追われるようになっては、もう取り返しがつかない。ここに来なさい。ここは安全だ。苦痛も、強迫観念も、辛い事も、何もない』

そうして人々はコーデュに手を伸ばす。

「コーデュ、だめだ!」

その手をかいくぐって、白い手の輪郭が現れた。

「だって、そこには夢も無いんだよ!」

コーデュは咄嗟にその白い手を掴んだ。瞬間、周りに居た全ての人々が消える。代わりに、目の前にエルバの輪郭が立っていた。

「信じて。僕を信じて。コーデュを信じて。こんなトコで終わっちゃダメだって、頑張るんだ。立ち止まるのは簡単だけど、もう一度歩き出すのは、凄く力が要るから、頑張って」

コーデュはその言葉に聞き覚えがあった。

ふと思い出して、髪に刺したかんざしに触れる。

そうだ、フィリエにも同じ事を言われた。

こんな所で、まごついている場合じゃない。私は、夢を掴むんだ。コーデュはそして、信じた。エルバを、自分を、出口がある事を。

「ルグネスーっ！ もう一本、早く！」

林にコルトの声が響くと、何処からともなく、矢が空を切る。ドスツと音を立てて、矢が木に突き立つ。その矢には、紐で未使用の矢が数本、括り付けられている。

鏃に魔術を埋め込んだ矢だ。爆破矢と言って、衝撃を与えると爆発する特徴がある。

コルトは素早くその矢に駆け寄り、瞬時に爆破矢を取ると、構えた。目の前まで迫っていたロドツシュに矢を打ち込むと、ロドツシュは水を蒔き散らしながら地面に崩れた。

「ふう、まさか一〇発も要るとは」

コルトはあらかじめ特殊な矢を何本か用意していた。召喚獣には魔術が有効だが、コルトにもウエルにもその心得は無い。唯一、ルグネスに多少有る。彼には支給係を命じていた。物陰でルグネスが鏃に魔術を埋め込み、コルトに渡す。

コルトは爆破矢を五本打ち込み一頭目を、そして先ほど二頭目を倒した。

しかし、休んでいる暇は無かった。

近くではウエルが大盾で攻撃を防ぎながら、リドルエルに銃弾を撃ち込んでいる。が、高等召喚獣のリドルエルには、銃の攻撃も殆ど効いていないようだ。

「ウエル！」

コルトもウエルの側に寄り、矢を放つ。リドルエルに矢が当たり、爆発が起こる。が、リドルエルは気にした様子も無く滑空し、コルト達を鎌でなぎ払う。

「うわあっ！」

二人は盾ごと吹き飛ばされ、一本の木に叩きつけられた。背骨がぎしりと痛み、呼吸が一時的に止まる。

「ははは、エルバ。いいぞ」

ベイトリオンはそんな様子を見ながら笑って言った。

「流石は私の息子だ。素晴らしい」

そう言つてリドルエルを呼び戻すベイトリオンに、ウェルは起き上がりながら言う。

「どこまでも愚かな人だ。それはもう、貴方の息子などではない」「なんだと?」

その言葉に、ベイトリオンはピクリと顔を引きつらせる。

「貴方も召喚師なら判っているはずだ。一度術の完成した材料は、もうその原型や主体を留めていない。それはもう、リドルエルという召喚獣であつて、貴方の息子ではない」

「黙れ! お前に何が判る!」

ベイトリオンが怒鳴る。

「お前は金が有れば何でも出来ると、そう言っていたな。だが、私には何も出来なかった。金は有ったが、誰も息子を助けてくれなかった。私が召喚師で、エルバがその子だったからだ! 私はこの世を滅ぼしてやるぞ。幸い、とても良い材料が手に入った。あれを使えば、エルディーレが召喚できる!」

エルディーレ。

それは炎を纏つた神の名である。無論、召喚されるのは神ではない。炎を自在に操り、全てを焼き尽くす力を持った人間だ。それは禁術として抹消されたものだった。

高位な魔術師を主体とする召喚術だ。その材料に、シュレグ一族の末裔であるコーデュは最適だろう。ベイトリオンはコーデュのピアスに気付いていたのだ。そして、彼女を手に入れた。

「この世を焼き尽くして、そしてもう一度、魔術師の時代を取り戻す! 魔術を使えぬ凡人どもは、また我らの脅威に怯えて暮らせばいいのだ!」

ベイトリオンが高らかに笑う。それを見ながら、ウェルは静かに言つた。

「……君の愚は、実に多いが、そのうち大きな物を三つ挙げよう」「何?」

「一つ目は、自らの不明を理不尽と名付け、美化した事。君は魔術

師として迫害されたかもしれないが、それは平民と近づく努力によって、埋められたかもしれない。君が意固地に、今は無い名誉に縋ったが故、自ら逃げ道を失った可能性は、大いにある」

「なんだと……！」

ベイトリオンは怒りに震えるが、ウエルは気にした様子も無く、言葉を紡ぐ。

「二つ目は、未来ある魔術師を、……君の希望となるだろう新星を、そのくだらない私怨のために使おうとした事。コーデュは魔術師としてこの世に再び、旧来とは違う形で貢献する事を望んでいた。そんな夢を持った同族を、過去に縛られた貴方が使おうとするなど、皮肉以外の何者でもない」

「貴様……言わせておけば！」

ベイトリオンは大きく手を払う。それを見て、リドルエルがはばたく。

「三つ目は、君の魔術師としての愚」

「黙れ！ エルバ、そいつらを殺せ！」

リドルエルは咆哮を上げ、ウエルとコルトに向かって急降下する。「我らアルキーシュの血への畏怖を忘れたる魔術師、まさに愚の骨頂！」

ウエルはそう叫び、コルトに手を向けた。コルトもまた、ウエルに手を向ける。彼らの手の平には、赤い紋章が浮かび上がっている。三匹の龍が、互いに絡みつき、円を描く紋章。アルキーシュの国旗、グランデール。

「我等が交わした、天と地と海の盟約を知れ！」

「大いなる天よ、ふくよかなる地よ、淀みなき海よ、我が名に応えよ！」

二人の声に呼応して、大地にグランデールの赤い紋が浮かび上がる。しかし、詠唱は間に合わない。リドルエルはウエルとコルトに再接近し、その鎌でなぎ払おうとする。

と、その時、突然茂みから人影が飛び出し、リドルエルを押し倒

した。

ルグネスのようだった。彼はリドルエルを地面に押し付け、時間を稼ぐ。わずかな隙だったが、その時間で、術は完成した。

「我らが名はアルキーシュ！」

「汝の力を示せ、偉大なる龍、グランデイル！」

そして、辺りは白い光に包まれた。

「な……っ」

ベイトリオンは驚愕に目を見開いた。白い光は、ベイトリオンの召喚獣を粉々に打ち砕く。リドルエルは黒い文字へと変化し、霧散する。その後、彼の愛した少年の体が、力なく横たわる。

そして光はベイトリオンをも包む。彼は一瞬死を覚悟したが、その感覚にハッとして己の手を見る。

魔力が、消えていく。

体中の血液が、流れ出るように。ベイトリオンの体から、魔力がほとばしり、そして消滅していく。

「まさか、魔術師殺し……まだ、アルキーシュの血に残っていたというのか……」

驚愕するベイトリオンをよそに、光はやがて消える。ベイトリオンの体から魔力は完全に無くなっていった。

呆然とするベイトリオンの目の前には、二人の青年。

そして、パリン、と軽い音を立てて、ベイトリオンの背後で境界の割れる音がした。

「さあ、コーデュ」

ウエルはベイトリオンのさらに向こうを見て、言った。

「その愚者に、君の夢と、意思と、力を見せてやるんだ」
ベイトリオンはその言葉に振り返る。

そこには、手を振りかざした、コーデュが立っていて。

そしてその手が下りた時、辺りは赤い光に包まれた。

9 もう一つの旅立ち

「こっち、こっちだ。出口だよ、コーデュ！」

長い時間を走り続けて、ようやく出口らしい物が見えた。

それは、真っ白な穴だった。

「ここから出て、元の世界に戻って。そして、忘れないで。信じて、歩き続ける事を」

「エルバは？ どうするの？」

「僕は、ここよりもっと先で、お母さんと一緒にお父さんを待つ。

そこからなら、お父さんに声が届く気がするんだ」

お父さんに、僕の事は気にしないで、頑張ってたて、伝えて。

エルバはそう言っていると、その輪郭さえ消してしまった。しばらくエルバの名を呼んだが、彼はもう現れなかった。

コーデュは静かに目の前の穴をくぐり、外に出る。すると、耳に声が届いた。

「君の夢と、意思と、力を見せてやるんだ」

ウエルの声だ。

コーデュは漠然とそう思った。そして、その言葉の意味を考えた。なら、私の全てを見せよう。

コーデュは脳裏で魔術式を展開した。それは、彼女の作り出した、最も複雑な魔術。

「ラウ・デイ・オール」と名付けた魔法。

発動させると、それは周囲を光で包み込んだ。炎のような、赤い光。

その光を受けた、ベイトリオンの恐怖に歪んだ顔を見て、コーデュは思わず表情を崩し、笑ってしまった。

その裏山には、何も無い。

雑木林や杉林が続くと、だだっ広い空き地が広がっている。

そこに、四人が居た。

ベイトリオンは拘束され、座っている。コルトとウエルは地面に座り、コーデュは彼らに包帯を巻いている。

「しかし、何だか判らないけど。コーデュの魔法が発動した時には、死ぬかと思った」

ウエルが呟くと、コルトも頷いた。コーデュは苦笑して言う。

「思いつきり派手な外見にしちゃったからね。こけおどしなもの」

「こけおどしと言うには、凄すぎる。何せ、射程範囲内の動物以外の物が消滅してる」

ウエルが辺りを見渡しながら言った。

コーデュが発動した「ラウ・ディ・オール」は、標的を絞った最高位攻撃魔法だ。

その標的とは、動物以外の物。建物、植物、皆消滅するが、命のある動物とその付属物だけは、何の害も受けない。

建築物の解体などに役立つか、とコーデュが独自に開発した魔術式だったが、使う機会が無かったので、今回が初めての起動だったという。

もし式が間違っていたら、全部消滅してたけどね、とコーデュはあっけらかんと言う。

「そんな事になったら、僕らはもう一度グランディールを使わなきゃいけなかったかもしれない」

「そうだな…… あんなしんどいの、もういいぞ」

ウエルもコルトも、少しやつれた様子だった。

「そつえば、貴方達、何したの？」

すごく疲れてるけど。コーデュが尋ねると、コルトは頷いて答えた。

「シユレグー門を打ち倒した四人の戦士は、各々が特殊な力を使って、彼らに挑んだ。私達の先祖アルキーシュは、グランディール……天と地と海に宿る三匹の龍と契約したと言われている」

「ああ……なんとなく、聞いた事あるかも」

「実際に契約したかどうかはさておき、私達アルキーシュ家の人間は、皆その血筋の力として、グランディールの発動権がある。グランディールの力は……魔術の封印だ」

「……封印」

「そう。アルキーシュはこの力で、まずシュレグ一族の力を無効化したと伝えられている。……で、その力は、私達も持っているのだが……」

「世代が進むに連れて、血の力が弱くなってしまったんだ。契約は続いているんだけど、僕らぐらいになると、二人一組で全力を出さないと、グランディールが発動出来ない」

にしても、こんなに辛いとは思わなかったよ……。

ウエルは珍しく表情を曇らせて、うなだれている。よほどの体力を消耗したのだろう。なにせ、元々彼らは魔術師ではない。魔力無しで魔術を使えば、命を削る事になる。それほどの力だ。二人で負担する分、まだ軽いのだろうが、一人では使えないのだろう。

それでコーデュはやっと、ウエルが三人目にコルトを選んだ理由が判った。こういう時のために、一緒に行動していたのだ。最も、こんなに早く使う事になるとは思わなかっただろうが。

「それより、ルグネス君は、大丈夫ですか」

リドルエルに掴みかかるなんて、たいした根性ですが。

ウエルが尋ねると、コルトは頷いて言った。

「まあ、あの短時間でまた物陰に隠れてるから、大丈夫なんだろう。頼りになる」

満足そうなコルトの言葉に、コーデュは僅かに笑む。やはり、彼の「良い」という勘は正しいのだろう。聞く所によれば、ルグネスは殺傷用の召喚獣を押し倒したらしい。主のためとはいえ、そんな恐ろしい事はよほど相手を思っていないと出来ないはずだ。

これでルグネスがクビになる事は当分無いだろう。コーデュがそんな事を考えていると、

「……何故、殺さない」

ベイトリオンが呟いた。

魔術師としての力を封印され、息子の死を完全に決定付けられた今、ベイトリオンは失意のどん底に居た。しかも、最後の召喚術は失敗し、家も無い。

何もかも無くなったというのに、まだ生きなければならないのか。

ベイトリオンの言葉に、ウエルは肩をすくめて言った。

「犯罪者には、なりたくないですし」

「……」

「それに、魔術師として殺したのだから、そこに残った貴方は、僕らの敵だったベイトリオンじゃない、って事で」

ウエルは言うが、ベイトリオンは首を振る。

「愛する息子の体も、家も、魔術も。恨む術さえ無くなった。生きていても、広がるのは絶望の海だけだ。殺してくれ」

「嫌です」

「頼む」

「お断りします」

ウエルはきつぱりと言って、それから、諭すように言った。

「この先に絶望の海しか広がっていないなら、諦めるより、船出する事を勧めますがね。……はい、これ」

「？」

ベイトリオンは膝に袋を置かれて、首を傾げた。中からは金貨が覗いている。

「コーデュを貸したのは一日でしたので、これだけ返金します」

「一日分は貰うのか、弟よ」

コルトのつつこみを無視して、ウエルは言った。

「希望が無いとお思いなら、作るがいいでしょう。僕らがそのように、貴方もまた、何一つ始めてはいない。失う物はもう、一つも無いのです。それは喜ぶべき事でもある。……貴方さえ興味があれば、ここに行ってみるといい」

ウエルはベイトリオンの拘束を解くと、一枚のパンフレットを差し出した。

そこにはウエルエツシュ共同学園と書いてある。

「いい所ですよ、たぶん」

ウエルはそう言つて、そして山を降り始めた。コルトもそれを追う。

いつまでも動かないベイトリオンに、コーデュは声をかけた。

「何処かで、エルバという少年に会いました」

「……！」

ベイトリオンは驚いた顔でコーデュを見る。

「僕の事は気にしないでくれ、頑張つて、生きてくれって……伝えるように、言われました……お父さんに、と」

「……」

コーデュはそれだけ言つと、ウエル達の後を追つた。

「ルグネス君、怪我は無かったですか」

帰りの道。ふいに物陰に入つて、そして出てきたコルトにウエルが尋ねる。

「ああ、大丈夫みたいだ」

「見た目より、タフですね」

「でなければ護衛は勤まらない」

そんな会話にコーデュは入っていけない。コーデュはルグネスの外見を見ていないからだ。

「……その人、どんな外見なの？」

「そうだなあ。黒い髪で……コーデュとそんなに変わらない体格ですよね」

「うむ……」

「あら。じゃあ、結構華奢ね。女の子でもおかしくない感じ」

「……」

コーデュの言葉にコルトは一瞬顔を顰めて、

「……確認した事はないが、……」

と曖昧に呟いた。そしてしきりに首を傾げる。

「……いや、いや、まさかな……もう一〇年以上、過ごしてるしな

……いや、うん、いやいや」

独り言を呟き続けるコルトを後目に、コーデュは今度はウエルに尋ねる。

「それにウエル。どうしてコルトの事、兄さんとか呼んでるの？」

「……まあ、成行きで……」

「……あと。……私を貸したお金って、何の事？」

「……」

「ウエル？」

コーデュが顔を覗き込んで尋ねると、ウエルは気まずそうに顔を反らした。それを見て、面白そうにコルトが言う。

「この守銭奴は、君をベイトリオンに売ったんだ」

「まあ」

コーデュはわざとらしく驚いて、そして怒った顔を作って言った。

「ウエルって、本当に酷い人」

「……」

「こら、ウエル。言う事があるだろう、ほら」

コルトがウエルを突くと、彼はちらつとコーデュを見て、立ち止まる。コルトもコーデュも立ち止まって、ウエルの行動を見守った。

ウエルはしばらく言い淀んでいたが、やがて、

「……すまなかった」

と、極小さな声で言った。

「一時的とはいえ、仲間である君を、敵に売った。仕方が無かったが……兄さんに言わせると、非人道らしい」

「じゃあウエルはやっぱ、悪いと思ってないんじゃないの？」

「う……」

「ひどい」

コーデュはぷいと向こうを向いてしまった。コルトは腹を抱えてブルブル震えている。よほどおかしいらしい。

ウエルは頭をかいて、そして、言った。

「僕は、お金や合理的な事しか考えていない、守銭奴だ。だから、……だから、確かに、悪いと本当に思ってるわけじゃない……でも、……その」

ウエルは一度空を仰いで、そして。

「その、僕に欠けている物を、教えて欲しい……僕と、プライスレスを探す旅を、続けてくれないか。コーデュ」

言い切つて、ウエルはまた俯いた。そんなウエルに振り返り、コーデュは笑つて言った。

「いいわ。一緒に行きましょう。三人で仲良く。いいじゃない、欠ける所を補い合つて。グランディールみたいね、私達つて」

無表情のはずのコーデュが、おかしそうに、笑んでいた。

「……コーデュ、なんだか変わったね」

「そうかしら？」

「うん、……でも、そんな君も嫌いじゃない」

「そうさ、コーデュ。君は君であれば、私の妻だ！」

そして当然の如くコルトの発言内容は無視しながら、彼らは山を降りて行った。

終わりの前に

銀髪の少女が一人、ベンチに腰掛けていた。

彼女は恐れていた。それは恐怖という程、強い物ではない。叱責に怯える、幼児が抱く物だ。彼女は長い間、ある視線とその主から、逃げていた。

そしてその日も、彼女は隠れていた。

アルキーシュ王国の王都クレシュ。その中央に広がる、優美な宮殿ロンドリア。その一角にある、大規模な花畑。宮殿を囲う高い壁までの間を埋め尽くす、色とりどりの花の中に、少女は居た。

というのも、少女が逃げている相手は、花よりも金に興味があるからだ。ここまでは探しに来ないだろう、と踏んで、少女はそこにくつろいでいた。

ひさしのついたベンチに座り、柔らかな風に揺れる七色を見つめる。

今日はさる王女の誕生会。彼女は王族の親類として招待されていた。定められた挨拶や出し物は終わり、自由に食事となるや否や、彼女は会場から逃げ出した。夕方には解散になる。それまで、逃げおおせればいい。

暖かな日差しが、辺りを優しく包んでいた。空気から春が感じられた。

僅かに届く花の香りに、うつとりと目を閉じる。そして彼女は、静かに眠りの世界に入ろうとしていた。

「イヴェリア」

声をかけられて、少女……イヴェリアは、飛び上がるほど驚く。見ると、一人の少年が立っていた。イヴェリアと同じ銀髪に、赤い瞳。歳にしては表情に欠けた、老成した雰囲気さえある、のっぺりした顔立ちの少年。

「……ウエルエツシュ様」

イヴェリアは名を呼び、そして俯いた。捕まってしまったのだ。
「ウエルでいいって言うのに。従姉妹なんだから」

「仮にも王位継承権を持つ人でしょう？ 私みたいな平民には、呼び捨てなんて……」

「なら、ウエル様でもいいよ。僕はウエルエツシュって名前、気に入ってないんだ」

ウエル、までならいいんだけど。少年……ウエルはそう言うのと、イヴェリアの顔を覗き込んでくる。イヴェリアは目を反らす、ウエルはそれを追う。

「イヴェリア。どうして僕を避けるんだ」

「避けてなんか……」

「じゃあ、どうして目を合わせてくれないんだ。お互い、性別を気にする年齢にはまだ早い。……何か、後ろめたい事でも？」

ウエルが問うと、イヴェリアは恐る恐る彼の目を見た。ウエルはいつも観察眼が鋭い。黙っていても、見られているだけで、全てがバレてしまいそうだった。

「……ウエル様」

「何だい、イヴェリア。言ってくれ。その方が、案外上手くいくかもしれないよ」

ウエルの言葉にイヴェリアは決心し、そして言った。

「ウエル様は、私に、お金を下さったでしょう？」

「ああ、うん。それが？」

「……使い切ってしまったんです」

「……全部？」

「はい……」

「……あんなに、有ったのに？」

「……はい……」

イヴェリアが小さく頷くと、ウエルは静かに溜息を吐いた。イヴェリアはたまらず、目を閉じた。

イヴェリアは王子であるウエルに従姉妹だ。

元々ウエル達の家系は平民なので、当然、ウエルとイヴェリアでは生活水準に格差が生じた。イヴェリアは出生の不公平さを感じ、ウエルの事を嫌うようになった。そんなイヴェリアに、ウエルは王族給付金の一部を譲渡し、関係の修復を願った。

イヴェリアとその母は喜び、ウエル親子との交友を改善し、貧しい生活からの脱却を試みた。が。

「気付いたら、お金が無かったんです」

イヴェリアは呟いた。

「最初は盗まれたのかと思ったけど、良く考えたら判って。あのお金、全部、服や、お母さんの肌や、おいしいご飯に変わっちゃってて……。私達、あつという間に全部使っちゃった……」

「……」

「学校では、お金の使い方とか、教えてもらえなかったし……やっぱり、貧乏人は、貧乏人って事なんでしょうね」

「……それで、もうお金はいらないのかい？」

「欲しいですよ。欲しくないわけじゃないです。でも……ウエル様に、申し訳無くて」

「僕の事はいい。どうせあの金は元々、僕のものじゃないし。本当に大事なのは、今回の事を踏まえて、僕と君がこれからどうするかだ」
「これから……？」

「うん」

イヴェリアが不思議そうに首を傾げる。ウエルはしばらく考えて、イヴェリアに言った。

「そうだ、イヴェリア。もし僕に申し訳ないと思っているんなら、僕の計画に協力してくれないか」

「計画、ですか？」

「イヴェリア。今回、君にお金をあげて良く判ったんだけど、人はいくらお金が有っても、その正しい使い方を知らない、無いのと

同じなんだ」

「……そう、ですね」

「だから、僕はまず、学校を作ろうと思う」

「学校？」

イヴェリアが首を傾げると、ウエルは「うん」と頷く。

「授業料の要らない学校。皆、知りたい事を好きなだけ勉強していい。君達が普通の学校で教わる事以外にも、たくさん知らないやいけない事がある。それを教える所。誰もが経済や、帝王学や……、そう、一見必要無さそうな事も、実は皆、知らないといけないのかもしれない。色んな事を学んで、成長して。それから世の中に出なければいけないんだ」

「……」

イヴェリアは何も言えなかった。ウエルの言う事は、いつも突拍子が無くて、判りにくい。

けれどイヴェリアは、彼の言葉に信頼を寄せていた。現にイヴェリア当人が、金を失っているのだから。

「イヴェリア。もし君が反省していて、僕に協力してくれるなら。

君に、その管理人をして欲しいんだ。給金は払うから」

そしてイヴェリアは、その提案を断れなかった。

否。

出生の不公平さ。それに甘えていた自分を認識した。そして、変わるうと思ったのだ。

グランディールは、天と地と海を司る、三匹の龍。その全ての尾は、一つに繋がり、青い宝石を輝かせている。

はためく国旗を見上げて、ベイトリオンは溜息を吐いた。
手には、ウエルの渡したパンフレット。

王都クレシユの、石畳の大街道を大きく外れた、未開発地。

山の麓の、湖と、それを囲む農場。そしてそこに佇む、大きな建築物。飾り気の無い石造りの学園……ウエルエツシュ共同学園、と、看板には書かれている。

行く当ても無いとはいえ、今更、学園などに用は無いはずだが……。

ベイトリオンは溜息を吐いて、そして踵を返そうとした。

と、

「あら」

と声。振り返ると、一人の女性が立っていた。

銀の癖のある髪を結い上げた、妙齡の女性。眼鏡をかけていて、理知的な顔をしてはいるが、どこか雰囲気柔らかい。服装が顔に似合わない、年配向けのワンピースだからかもしれない。

「お客様？ それとも、新しい生徒さんかしら？」

彼女はそう言って、ベイトリオンに歩み寄ってくる。

「いや、私は……」

ベイトリオンは首を振るが、彼女はその手にあるパンフレットを見つけて、頷く。

「ああ、ウエル様に会ったんですね。そのパンフレットは、ここに入学するのに必要なんですよ」

彼女はにっこりと笑って言った。

「ようこそ、ウエルエツシュ共同学園へ。私は、支配人のイヴェリアです。……ウエル様から、ここの説明はありましたか？」

「いや……」

「やっぱり。ウエル様は自分で学校を作っておいて、説明したからないんですよ。面倒だって。結局私が、全部しなきゃいけないんです。酷いでしょう」

ウエル様と私、従姉妹だから、まあ許してあげるんですけど。

イヴェリアはそう言って笑う。

そういえば、髪の色や質、瞳の色がウエルと同じだ。賢そうだが、

ウエルと違って鼻にかけたような様子は無い。

「じゃあとりあえず、簡単に説明しますね。ここはウエル様の作った学校です。老若男女、人種、職種に関わらず、誰でも入学できます。……あ、そのパンフレットを持っている人に限って、ですけど。ここでは好きな学習を、好きなだけして結構です。寮や食堂も完備しているので、ここで暮らす事も出来ますよ」

「……学習？　しかし、私は見ての通り、歳で……」

「あら。勉強をするのに、年齢は関係ありませんよ。人生はそれぞれのが、勉強の連続だと、ウエル様も言ってますしね」
「……」

ベイトリオンは困ったように、辺りを見渡した。

学園の敷地内では、小さな子供が遊んでいる。それを、老人が見守っていた。彼らも生徒だとしたら、イヴェリアの言っている事は、本当なのだろう。

「……しかし、金が……」

「入学金を含め、料金は要りませんよ」

「……運営は成立しているのですか」

「私達管理部が、資産運用して賄っていますから。中には、ここで学んだ事を実行して、それで儲けたお金を寄付して下さる人も居ますけど……原則として、お金は取りません。変わりに、他の物を」

「他の、物」

「貴方が、誰かに、何かを与える事。それが条件です」

「……何かを、与える？」

「はい。知識の共有、というものです。もちろん、お金や物でもかまいませんが……話は、タダですものね。皆さん、語る事を選びます」

ベイトリオンは苦笑して言った。

「なら、私はここに入れない。私には語れるような事も、与えられるような事も無いからね」

「あら、私はそうは思いませんけど」

イヴェリアは微笑んで言った。

「例え、貴方が些細だと思ってる事でも、他の人にはとても重要な事もありますよ。それに、今生きているという事は、それだけで素晴らしい事です。……良かったら、貴方のお話を聞かせてもらえませんか？」

「……しかし私には、面白い話など何も……」

「貴方の事が知りたいんです。貴方が今、ここにいます。それはそれだけで、素晴らしい事ですもの。私に、貴方との時間を与えてくれませんか？」

「……」

イヴェリアの真摯な眼に、ベイトリオンは思わず俯いた。

誰かにこうして求められた事など、殆ど無い。

話をしてくれ、とせがまれるなど、一体、何年ぶりの事だろうか。
『ねえ、お父さん。お話を聞かせてよ。僕、お父さんやお母さんの事が知りたいんだ』

そう言ってくれた我が子は、もうここには居ない。
けれど。

ふと顔を上げると、子供達が焚き火をしようとしているのが見えた。

生木に火をつけるのには、大変な技術が必要だ。

子供達は煙に涙を流しながらも、懸命に火を起こそうとしている。
それを見かねて、老人が近付き、木の積み方を変えてやる。

そうすると、煙は減り、やがて小さな火が起る。子供達は喜んで、老人にもつと何かを教えるように、せがみはじめる。

「……」

その様子を見て、ベイトリオンは、小さく頷いて、イヴェリアを見た。

「……私は、ベイトリオン・クレッセル……召喚師の子として生まれた」

ある日の朝。ロキシヌ村のはずれ、ボルタ工房。

コーデュとウエルが出て行ってから、盛況とは言えないが、静かに商売を続けていたフィリエは、その日も開店の準備に追われていた。

箒で玄関を掃き、ショーウィンドウを丁寧に磨く。製品を並べ、価格表を置く。近頃はオーダーメイドも受け付け、リピーターは少しずつ増えてきていた。

「あの子達、元気にしてるかねえ」

それでも時々、あの時の盛況を思い出す。その度にフィリエは苦笑した。

あれほどの才能を持つ人間が、自分のような妥協した者の側に、いつまでも居るはずがないのに。

いつか本当に帰って来たりしたら嬉しいけど、それはそれで悲しい事だしね。

フィリエはそんな事を考えながら、商品を磨いていた。
と、

「あの、求人を見たんですが」

店に男が入って来た。年は一五、六といったところだろうか。亜麻色の髪の、穏やかそうな顔をした青年だった。

「……求人？」

「あの、魔術師募集中って……」

「あー。そういえば、解約してなかったわ」

貼り付けていきなり来たコーデュに、フィリエは求人広告を貼った事さえ忘れていたようだ。その言葉に、青年は驚く。

「えっ、じゃあもう、受け付けてないんですか？」

「まあ、今は居ないけど……君、魔術師？」

「あ、はい……その、未熟ですけど……」

「……どうしたもんかねえ。別に今のままでも構わないっちゃ構わ

ないんだけど……」

フィリエが悩んでいると、青年は必死に頭を下げて言った。

「お、お願いします、雇って下さい！ 僕、ここを断られたら、ホントにもう行く当ても無いし……それに、僕、ここの作品がとても気に入っていて。ほら、おでこに広告の人が宣伝していたでしょう？」

「ああ、ちょっと前にね」

「あの時に、僕もここの商品を買わせてもらって……僕、落ちこぼれだから、もう魔術の道なんて諦めようと思ってたけど……ここの商品を見ると、もう一度頑張ろうって、そんな気になって、……ええと、だから、ここで働きたいって思って……」

「……へえ。落ちこぼれなの？」

「詠唱速度が、その……下の下で」

「……思いつき遅いのね」

「はい……」

フィリエは一つ溜息を吐いて、そして言った。

「いいわ。職人なんて、じっくり時間をかけてなんぼだからね。雇ってあげよう。その代わり、あんたもここが終着点だなんて思うんじゃないよ。いつかここを出て、夢を叶えるんだからね」

「いいんですか！ ありがとうございます！ 僕、ロイって言います。よろしくお願いします！」

そう頭を下げるロイに、フィリエは自分の過去の姿を見る思いだった。

魔術師の姉に憧れ、魔術を学び、そして何事も成せなかった自分。それは時代背景や、実力や、そして支援者の有無で変わったかもしれない。

夢を叶えられる人間は少ない。が、夢を持つ人々を助ける事は、やろうと思えば出来るかもしれない。

フィリエは苦笑して、ロイを奥に案内し、製作の手引きを渡した。

「親愛なる、カティーナへ

元気ですか？

手紙の最初で聞かれても、返事する時にはすれ違うから、意味無いですね。

でも、気になるので尋ねておきます。元気ですか？ 生活は、順調ですか？

私の方は、何だか良く判らない事になっています。一四回目の就職、上手くいったんですけど。ひよんな事から、冒険者と一緒にウロウロする事になってます。

でも、楽しいです。なんだか、今まで知らなかった事が、いっぱいあつて。

住所が確定したら、また連絡します。それまでは一方通行ですね。

そちらの方……魔術連動型工作機械の開発は、上手くいってますか。危なそうな名前だし、怪我とか、体には気をつけて下さいね。

私のほうはもう、色んな意味で元気です。なんというか、毎日変な二人に振り回されて、大変です。でも、やっぱりそれは楽しいところもあ

「コーデュ、そろそろ出発しよう」

ウエルの声に、コーデュは慌てて手紙を隠した。

村の本屋に立ち寄り、地図を買って来ると言ったウエルが、なかなか出てこない。その間、コーデュは手紙をしたためていたのだ。

「地図は有ったの？」

コーデュはトランクに手紙を押し込んで尋ねる。ウェルはその手紙については言及せず、頷いた。

「ついでだから、大陸地図にしておいた」

「げ……高いんじゃないの？」

「良い物は、いくら金を出しても買え。職人の鉄則だそうだよ。ま、広告を打つからって、多少まけてもらったけどね」

ウェルはそう言っ、一冊の地図を見せた。地図というよりは辞書だ。それだけでコルトぐらいなら殺せそうな厚さだった。

「さ、これで何処へでも行けるね……兄さんと呼んでくれる？」

「ああ、はいはい。……コルト、いつまでもそうしてないで、こっち来なさいよ」

コーデュが呼ぶと、物陰に入っていたコルトがのっそりと出てくる。

「どうだった？」

「教えてくれない……」

「教えない辺りが、なおさら怪しいわね」

「うん……」

どうやら、ルグネスの性別の事でコルトは悩んでいるようだったが、しばらくすると、コルトは首を振って言った。

「まあ、いい。ルグネスはルグネスだ。男だろうが、女だろうが。

良いものは良いからな」

秋風は、少しづつだが、冬を呼んでいる。

コルトの格好に違和感が無くなり始める。三人は、冬を前に服を買い替え、さらに西へと旅立つ。

「これからどうするの、ウェル」

「うーん。行く当ては無いからね」

ウェルが呟くと、コルトが言った。

「そういえばルグネスが、海に出て魚を釣ってみたいとか、捌いて

みたいと言っていたな」

「海？ 私、海って見た事が無いわ」

「じゃあ、西の果てまで行ってみようか」

ウエルが言うと、コルトが笑って言う。

「西の果て、というと、大陸から船出か？ まっすぐ西に行くと、

この大陸の東に着くという話だぞ。確かめてみるか？」

「一生かかりますよ」

「それもそうだな」

「じゃあ、大陸を一周するっていうのはどう？ どうせ、目的地は無いんだし」

「そうだね。夢はどこに転がっているか判らないし……」

ウエルが頷いて言う。

「この三人…… + で、夢を探す旅に、いざ再出発と行こう」

「ええ」

「うむ。ついでに、式場も探さねばならないしな！」

そして三人と護衛は、西へ向かって歩き始めた。

立ち止まるのは容易だが、もう一度歩き出す事は難しい。
ならば、歩き続けるしかない。

彼らの旅は、まだ、始まったばかりである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0687c/>

グランディール

2010年10月8日14時50分発行